

木簡研房

第二四号



第二四号



木  
簡  
学  
会

題字  
藤枝

晃  
刻

## 目

## 次

卷頭言——情報化と松と柏——

東野治之 1

目次

vii

凡例

iii

二〇〇一年出土の木簡

1

## 概要

1

奈良・平城京東市跡推定地

25

奈良・薬師寺旧境内

27

奈良・旧大乘院庭園

32

奈良・東大寺

33

平松 良雄・鶴見 泰寿

34

奈良・藤原宮跡

35

奈良・藤原京跡左京一條二坊

36

奈良・藤原京跡左京六条二坊・七条二坊

37

奈良・石神遺跡

38

竹内 大樹  
亮 16

18

京都・佐山遺跡  
大阪・大坂城跡  
大阪・東心齋橋二丁目所在遺跡官本 康治・島居 信子  
菅原 章太

39

奈良・飛鳥池遺跡  
京都・長岡京跡

21

京都・平安京跡右京八条三坊七・八・九・十町

22

京都・佐山遺跡(B2地区)

23

堀内 明博  
岩崎 誠

24

竹原 一彦  
佐藤 隆

25

小倉 徹也・島居 信子

26

大阪・廣島藩大坂藏屋敷跡

27

大阪・鬼虎川遺跡

28

iii

大阪・上津島遺跡	服部聰志
大阪・上町東遺跡	中岡勝
兵庫・六条遺跡	渡辺昇
兵庫・明石城武家屋敷跡	渡辺昇
兵庫・溝之口遺跡	42
兵庫・赤穂城跡二の丸	41
愛知・志賀公園遺跡	40
愛知・下懸遺跡	44
静岡・仁田館遺跡	47
神奈川・史跡建長寺境内	46
滋賀・官町遺跡	49
滋賀・柳遺跡	51
滋賀・八角堂遺跡	53
岐阜・柿田遺跡	56
長野・八幡遺跡群社宮司遺跡	59
福島・荒田日条里制遺構・砂畠遺跡	63
福島・泉廢寺跡（陸奥國行方郡衙）	66
宮城・中野高柳遺跡	68
宮城・市川橋遺跡	70
岩手・仙人西遺跡	74
秋田・十二社B遺跡	76
千葉・伊藤博幸学	78
高橋幸学	87
89	87
水井宏幸	90
池本正明	91
岩本美貴	92
平井美典	93
近藤大典	94
寺内貴美子	95
猪狩みち子	96
荒瀬人	97
新潟・吉野武	98
新潟・大西幸	99
新潟・古尾谷知浩	100
古市晃	101
宮田眞	102
宮田貴	103
和田龍介	104
中嶋徹	105
長谷川健一	106
宇田川浩一	107
木村淳一	108
加藤健一	109
大西徹郎	110
和田龍介	111
中嶋徹	112
長谷川健一	113
宇田川浩一	114
木村淳一	115
加藤健一	116
新潟・北小脇遺跡	117
新潟・浦廻遺跡	118
新潟・船戸桜田遺跡	119
新潟・船戸川崎遺跡	120
烏根・出雲國府跡	121
岡山・川入・中瀬川遺跡	122
広島・安芸國分寺跡	123
徳島・南前川町一丁目遺跡	124
妹尾	125
藤川智	126
安川安	127
川角田	128
智德	129
三佐	130
川智	131
昭満	132
之幸	133
昭幸	134
之幸	135
昭幸	136
之幸	137
昭幸	138
之幸	139

一九七七年以前出土の木簡 (二四)	市 大樹	158
奈良・平城宮跡		
糸文の訂正と追加 (五)		
福島・荒田日条里遺跡 (第一七号)	岩宮 隆司	164
大分・飯塚遺跡 (第二二号)	大分野 和己	164
都城出土漆紙文書の来歴	古尾谷 知浩	164
〈但馬特別研究集会の記録〉		
日高町の古代遺跡と出土木簡	加賀見 省一	167
出石町の古代遺跡と木簡	小寺 誠	173
袴狭遺跡出土木簡と但馬国豊岡盆地の条里	山本 崇	187
九世紀の国郡支配と但馬国木簡	吉川 真司	200
文書と題籠軸 (報告要旨)	杉本 一樹	224
討論のまとめ	館野 和己・今津 勝紀	240

彙報

鶴見 泰寿・渡辺 晃宏

編集後記

寺崎 保広

英文目次

コラム

長岡京跡右京・久保川遺跡出土の墨書き石  
(古関 正造)

会告

京奈和自動車道の平城宮跡地下通過計画問題の現状と木簡学会としての取り組み、及び

第二回「高速道路計画で危機を迎えた世界遺産平城宮跡を考える」シンポジウムの開催について

## 凡例

次の調査の木簡を一括して紹介する場合は、調査ごとの通し番号とした。なお、「糸文の訂正と追加」では、既報告木簡の訂正、新出木簡の追加の順とし、一括して通し番号を付した。

「以下の木簡出土事例報告は、各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して執筆していただいたものであるが、体裁及び糸文の記載形式などについては、編集担当の責任において調整した。執筆者の所属が発掘機関と異なる場合には、執筆者名に註記を加えた。

「報告は「一〇〇一年出土の木簡」「一九七七年以前出土の木簡」及び「糸文の訂正と追加」の三欄に分けて掲載した。

「各欄ごとの遺跡の排列は、それぞれほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

「各遺跡の記載は、所在地、調査期間、発掘機関、調査担当者、遺跡の種類、遺跡の年代、遺跡及び木簡出土遺構の概要、木簡の糸文・内容、関係文献（当該木簡記載の報告書など）の順とし、国土地理院発行の五万分の一地形図を使用して、木簡出土地点を▼で示した。（）内は図幅名である。

なお、「糸文の訂正と追加」の欄では、当該報告が掲載された本誌の号数を遺跡名の下に（）で明記し、地図は原則として割愛した。また、「遺跡及び木簡出土遺構の概要」は省略し、必要な場合は「木簡の糸文・内容」において最少限の言及を行なった。

「」を示す（端とは木簡の上下両端をいう）。

「」を示す（端とは木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す）。

木簡番号を17(2)のごとく付した。

「糸文に加えた符号は次の通りである（p.1第1回参照）。

「」木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていること

を示す（端とは木簡の上下両端をいう）。

木簡番号を17(2)のごとく付した。

り原字の左傍に付した。

。 空孔のあることを示す。但し、釘孔など別の用途の

空孔は省略した。

抹消により判読困難なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。

欠損文字のうち字数の数えられないもの。

前後に文字の統くことが内容上推定されるが、折損

などにより文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

横材木簡に本目と直交する方向の刻線が施されてい

ることを示す。

木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

「」 校訂に関する註で、本文に書き換わるべき文字を含

むもの。原則として文字の右傍に付す。

( ) 右以外の校訂註、及び説明註。

「×」 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上の要領で右傍に示す。

カ 編者があえた註で、疑問が残るもの。

マ、 文字に疑問はないが、意味の通じ難いもの。

同一木簡と推定されるが、折損などにより直接つな

がらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければ

ならなかつた場合、行末・行頭に付けたもの。

\* 卷頭図版に写真的掲載されているもの。

一、祝文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

次の一八型式からなる（ix頁第2圖参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿つたもの。

020型式 小形矩形のもの。

021型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたるもの。方

頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたるもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

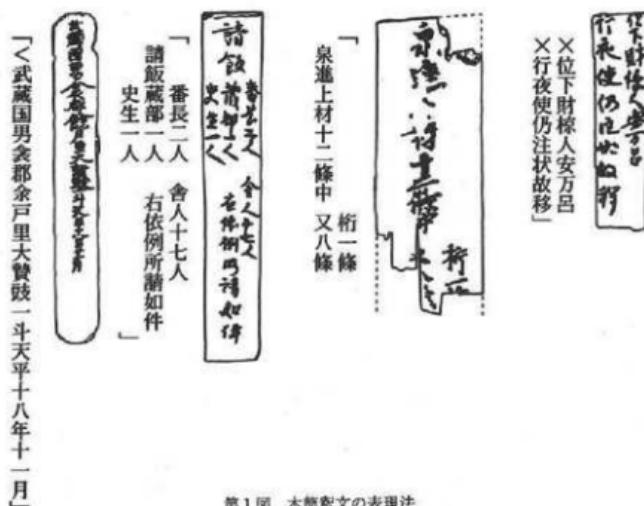
長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は

長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

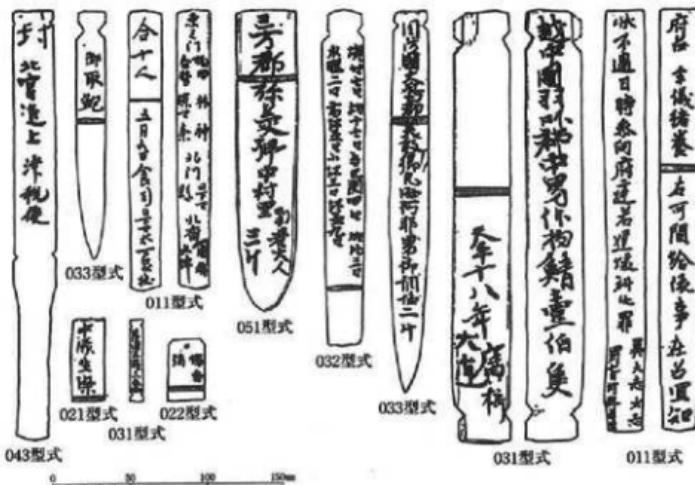
(S)型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は

折損あるいは腐蝕して不明のもの。

長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作つたもの。



第1図 木簡訟文の表現法



第2図 木簡の形態分類

043型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状に作り、残りの部分の左右に切り込みを入れたもの。

049型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによつて原形の失われたもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせてゐるが、他端は折損。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書きのあるもの。

065型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によつて原形の判明しないもの。

091型式 削肩。

なお、中世・近世の木簡については、以上の型式番号に適合しないものが多いので、註記を省略する場合がある。

一、この凡例は木簡出土事例報告に関するものであり、論文などにおいては、必ずしもこれを用いるものではない。

一、英文目次は天理大学のW・エドワーズ氏にお願いした。

# 奈良・平城京東市跡推定地

へいじょうきょうひがしいち



(核) 井

掘立柱建物九棟、井戸一基、

- |                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| 1 所在地           | 奈良市東九条町                  |
| 2 調査期間          | 第二七次調査 一〇〇一年(平13) 一〇月一一月 |
| 3 発掘機関          | 奈良市埋蔵文化財調査センター           |
| 4 調査担当者         | 中島和彦                     |
| 5 遺跡の種類         | 都城跡                      |
| 6 遺跡の年代         | 奈良時代・平安時代                |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                          |

- 東市跡推定地の四つの坪(左京八条三坊五・六・十一・十二坪)の内、  
今回の発掘区は十二坪の西端で坪の南北中央ラインの  
やや南側にある。十二坪内に発掘調査は今回が初めてである。

木簡が出土したのは井戸SE五〇二である。方形縦板粗横残留の  
井戸で、井戸枠は内法で一边約〇・八m。枠は上から約一m分が腐  
食で失われ、そこから下の部分が残る。深さ約一・六mまで掘削し  
たが底には到らなかった。縦板には大小さまざまな形の板が数枚重  
ねて使用され、あり合わせの材料で作った雑な印象である。縦板は

横桟のある二ヵ所のみ崩れずに残り、横桟の間は土圧で内側に折れ  
曲がる。横形は平面方形で南北約二・四m東西二・一m以上。枠内  
からは木簡五点を含め多種の遺物が出土した。土器は土師器、須恵  
器、黒色土器があり、墨書き器も一九点ある。墨書きは「廻」二点、  
「櫛」一点のほか、記号「匱」が一点以上ある。「廻」の墨書き土  
器は発掘区の北約一五〇mの第二次調査でも出土しており、その  
関連がうがえる。他には和同開珎一点、神功開宝二点、手斧、釣  
、盾串二点、横棒二点、著多数、動物遺存体、植物遺存体がある。出  
土土器から、井戸の年代は八世紀末から九世紀初めの時期と考えら  
れる。

土坑四基がある。  
掘立柱建物の密度は高く、重複關係から五時期以上ある。いずれ  
の建物も発掘区外につづき全体が明らかなるものはないが、柱掘形の  
規模から中小規模の建物と推定される。出土土器から八世紀中頃か  
ら九世紀初めのものと考えられる。

(72)×(11)×1 081



(72)×(11)×1 091



091



091



091



091

(2)～(4)は削屑で、長さ三一～七八ミリある。(5)も削屑だが長さ二二五ミリあり比較的厚めの削屑である。(2)は直接は接合しない二片からなるが、同一箇所と判断した。いずれも文字は判読できない。

## 9 関係文献

奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成二二年度」(二〇〇三年刊行予定)

(中島和彦)

奈良・薬師寺旧境内



(奈良・桜井)

木簡は、東西溝 S.D. 二七  
九〇の最下層から六点出土  
した。この溝は幅〇・七m、  
以上、現存深さ〇・七m、

- |   |               |  |
|---|---------------|--|
| 1 | 所在地           | 奈良市西ノ京町  |
| 2 | 調査期間          | 二〇〇一年(平13)一〇月  |
| 3 | 発掘機関          | 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部  |
| 4 | 調査担当者         | 代表 金子裕之  |
| 5 | 遺跡の種類         | 寺院跡  |
| 6 | 遺跡の年代         | 奈良時代～江戸時代  |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 調査地は、平城宮跡右京六条二坊十三坪の北西隅、薬師寺寺域の西辺にある。今回の調査は駐車場建設に伴うもので、調査面積は東西一〇m南北三mの約三〇mである。 |

調査の結果、地山直上の整地土面で二条の素掘りの溝を検出した。

薬師寺を中心伽藍に至る寺域内東西道路の南側溝と考えられ、西流して西二坊大路東側溝の延長上に位置する南北溝SD-二七八五に注ぎ込む。雨溝は併存し、廃絶は近世にする。SD-二七九〇からは、他に奈良時代から室町時代にかけての軒瓦、室町時代頃の瓦質の擂鉢、江戸時代の土師器（灯明皿としての使用裏跡あり）、漆器碗、灯明皿受台などが出土している。木簡は掲出の一点以外全て墨付きのみの断片である。

## 8 木簡の訳文・内容

(1) [一カ] 十□月八日 [供う] 廿一ヶ度除□□□ (318)×(37)×4 361

中世以降の折持札の類と考えられる木簡で、右辺と下端は原形を保ち、右辺上部には切り込みがあった可能性がある。左辺は欠損しており。上端も現状より若干長かったと考えられる。一定期間日光にさらされていたためか、文字が一部白く浮き上がり、斜光により辨読できる部分がある。

## 9 関係文献

奈良文化財研究所「奈良文化財研究所紀要二〇〇一」(1001)  
年 (渡辺晃志)

## 奈良・旧大乗院庭園

きゅうだいじょういんていえん

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1 所在地           | 奈良市高畠町                |
| 2 調査期間          | 二〇〇一年(平13)一〇月～二〇〇二年一月 |
| 3 発掘機関          | 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部     |
| 4 調査担当者         | 代表 金子裕之               |
| 5 遺跡の種類         | 庭園跡                   |
| 6 遺跡の年代         | 古代～近代                 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                       |



(奈良)

調査地は平城京跡左京四条七坊東端部にある。奈良時代の元興寺禪定院の故地とされ、平安時代後期以降は興福寺の門跡寺院である大乗院となつた。日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園保存修理事業」の一環の調査で一九九五年度以降継続して行なつており、過去にも木簡が出土した(本誌第三号)。今回は西小池北端が想定される北区と、東大池南西部

の島を対象とする南区の計約五〇七m<sup>2</sup>を調査した。主な検出遺構は西小池、中島、奈良時代とみられる柱穴列、中世の焼土面、近代の建物基礎、防空壕、テニスコートなどである。

木簡は北区の池SG八三三一埋立土から出土した。SG八三三一は、いくつかの小池が連なつて形成される西小池の内、北端の池で、東西九m南北一四mのほぼ揃円形を呈する。中央部に島SX八三三二をともなう。SG八三三一は室町時代に掘られ、改修を受けながら近世を通じて存続し、廢仏毀釈以降に埋め立てられた。池の埋立土からは、木簡三点以外に近代初期の学校関係遺物が多数出土した。

片面に「ビンチヤン」と墨書きした直径五cm厚さ一・八cmの瓦軒用円盤状道具も出土している。周辺が明治時代前半に飛鳥小学校の敷地となっていたことと関連する。

#### 8 木簡の积文・内容

- (1) 「○□年生」 65×21×7 011
- (2) 「九四 諸 日 □ □□」 21×275×11 051
- (3) 「御 笈 □ □ ○ 事務 □ □」 450×165×10 011

(1)は上部に穿孔を有する木札。一字目は三もしくは五であろう。

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要一〇〇一』(11001)  
年 (馬場 基)

(2)は石版の枠木。枠木の下辺にある横枠材とみられる。石版の石材も出土した。(1)(2)は飛鳥小学校に関連する。(3)は上部に穿孔を有する看板。腐蝕が激しく、一部に穴があいてしまうほどで、文字の浮き上がりなどでかろうじて読める。飛鳥小学校が移転した後に、事務所として使われていた際の遺物であろう。

#### 9 参考文献

## 奈良・東大寺

1	所在地	奈良市雜司町
2	調査期間	年三月
3	発掘機関	奈良県立橿原考古学研究所
4	調査担当者	平松良雄
5	遺跡の種類	寺院跡
6	遺跡の年代	奈良時代
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	史跡東大寺旧境内で、国宝建造物の金堂・南大門などの主要伽藍に対し防災施設設置工事が実施され始めたのは一九九〇年四月である。工事に先づ発掘調査が実施され、八年までに九次を数え、さらに九九年に開運施設工事の追加調査を行なつて一〇
2	防災第九次	一九九八年（平10）七月～一九九九

年にわたる発掘調査が終了し、調査報告書が刊行された。発掘調査の全容については同報告書に掲載したい。木簡は過去に防災第三次調査でも出土しているが（本誌第一六号）、今回報告するのは、九八年度に実施された防災第九次調査の九八一二区SXO一、九八一三区SKO一の二つの遺構から出土した木簡についてである。

九八一二区は戒壇院東側から西塔跡に抜ける小道沿いに設置された幅約一m長さ五一・二mの狹小な調査区である。このやや南寄りでSXO一が検出された。SXO一は幅約九m深さ一・三mを測り、東西方向の小河川か流路と考えられるが、上流には旧境内第九次調査区（大仏殿西廻廊接地）が位置しており（本誌第一号）、ここで検出された流路の下流と考えられる。よって流路の性格は基本的に同じもので、それは木簡の性格からも裏付けられよう。

SXO一は緩やかな流れの堆積によって埋没したものと考えられるが、堆積は大きめ三つに分けられる。下層は茶色粘土層で、この堆土は炭化物や青銅精錬作業の廃棄物を含まず、木簡や有機物を含む。平城II～III期頃の土器を含むことから、この頃機能していたと考えられる。また近江産と曰される土器器皿が含まれていることは注意を引く。中層は黒色有機質土層で、木簡の他に土器・青銅・銅・銅鋳・木炭・木製品・炉壁などの焼土塊など、多様な遺物が含まれている。最大の特徴は鉄造関連の廃棄物で、他に文房具も注目されよう。木簡はこの廃棄物の一部として含まれる。木簡は二〇点

近く出土しているが、流路の南岸に集中して見られる傾向がある。この他、須恵器皿B-Iの底盤に「某」と墨書きされた転用碗も出土している。上層埋土は暗灰色粘土層で、中層と同様に青銅・銅津・木炭などの铸造廃棄物も出土するが、質的に硬質であり、恐らくSKO-O-Iを埋立整地したものと考えられる。この層からは平城期の土器が出土しており、SKO-O-Iの廃絶年代を示す。土器のうち杯・皿類は硯に転用されたもので、墨書き書の破片も見られる。

九八一三区は九八一二区の南端から西に分岐して設定した調査区である。SKO-O-Iはその一端が検出されたのみで、確認できたのは東西幅約二四m南北約一四m深さ約〇・二m程の不整形なものである。SKO-O-Iは受熱痕が見られ、埋土は厚さ五cm程の炭化物が多く混じる砂質土が水平に一〇層以上堆積しているのが確認できた。洗い剝などの金属選別作業時の廃棄土と考えられる。出土品の中に蓮弁状の青銅製品も含まれるが、質は非常に劣悪である。土坑内の東西の二カ所に意図的に木製工具を埋納した状況が確認できた。この木製工具は三〇点以上あるとみられ、内訳は曲物容器やヘラ、折敷などである。これらのうち特にヘラには擦痕や青銅の付着、受熱による炭化が見られることから、青銅製品製作のための工具が一括して廃棄されたものと考えている。このうちのヘラの一点に墨書きが見られるが、私説できない。

SKO-O-Iは谷を埋め立てた整地土上に掘られている。SKO-O-I自

体の埋土からは平城期頃の土器が出土している。從来から戒壇院の南東には铸造関連遺構が集中することが指摘されてきたが、今回の調査によって幾例かの追加ができた。土器の年代からみれば、東大寺創建期に構築、廃絶されたものばかりである。このエリアには堀池春峰氏の指摘のとおり、造東大寺司鉄所の現業部門が設置されていた蓋然性が高いといえよう。

#### 8 木簡の訳文・内容

##### 九八一二区SKO-O-I

(1) 「卅四斤 [大百] 三斤」

・「廿 [枚] 二」

156×35×10 032\*

(2) 「卅斤」

116×29×6 031\*

(3) 「語人鳥 [奉カ] 七十六斤 〔一〕」

・「七月廿日」

177×34×6 032\*

(4) 「生士マ万呂十九斤 〔一〕」

・「十一月廿六日 [前大目]」

138×33×5 032\*

(5) 「く出雲豈國」

・「く□」

122×18×2 032

(6) 「左六竈 □」

・「□□」

183×35×5 051\*

(7) 「菩薩薩第第

・「□第第」

・「第第第」

(180)×(26)×2 081\*

今回出土した木筒の大半は付札木筒であるが、物品名を記載したものはない。恐らく銅の付札であろう。調査地の東側では、大仏殿西廻廊接地の発掘調査で大仏铸造に関連する銅の付札が多く出土している（本誌第一号）。今回の出土地は同じ自然流路の西側延長にあるため、出土木筒も一連のものと考えられる。

(1) は短冊形の材の上端に切込みをもつ付札で、表には重量と枚数を記す。表「卅四斤」とそれ以下（裏面を含む）とは筆が異なるようである。「一行書き部分は一つの重量を大・小両方で表示したものである（大一斤は小三斤と同じ）。裏には削り残りの墨痕があり、一度書かれた文字を削った後に書かれている。「枚」は銅のインゴットの単位で枚数をあらわす。山口県長登銅山跡出土の精鍛銅付札木簡でもやはり重量とは別に数量を「枚」で表現している。(2) も付

札木筒で上下に切込みがあり、裏側は未調整である。

(3)(4) は上端に切込みのある付札で、表には人名・数量、裏に日付を記す。(3) は文字はやや太く、墨が若干滲んでいるため判読しにくいたが、運筆から判断して、冒頭は人名「語人鳥」四文字目は「奉」と読んでおく。語人鳥が奉った銅七六斤の意であろう。数量の記載の右下に異筆で「一」と記すのは、他の木筒で「枚二」などと記すように銅塊の枚数を書き表したものか。語氏は「出雲國風土記」に意宇郡安来郷の人として語臣猪麻呂がみえ、天平一一年（七三九）備中國大税負死人帳（天日本古文書）一二一五〇には薩摩郡御賛那勝部里戸主として語直義の名がみえ、中国地方に多く分布したらしい。(4) の「生王マ」は壬生部のことである。量「十九斤」の右下には(3)と同様に異筆で「一」と書かれる。裏面日付の右下にはやや薄い墨色で「前大目」と書かれるが、これも異筆であろう。大目は大国国司の第四等官だが、その國名も、また壬生部万呂との関係も明らかでない。なお、「人名+数量（斤）」の記載様式の銅付札は、神電・天平頭の山口県長登銅山跡出土木筒にも例がある。「大神直都・美・百十五斤枚二」・「安藤石田功外・量七斤枚二」・「日下マ色夫七月功・大殿七十斤枚二」などがそれで、全長一〇七・一三四、上端に切込みのある付札である（本誌第一三号・『瓦谷編山跡』II 美東町教育委員会、一九九三年）。これらの付札は、鋳夫による銅の精鍛の出来高を記し整理したものという。(3)(4) の木筒は長登

木簡と共に通するようにみえるが、長登木簡で出来高を示す「功」の

文字が東大寺木簡にはみられない。長登木簡は精緻された銅の枚数も同筆で記載されるが、東大寺木簡は異筆である。また、東大寺木簡では日付が記されているのに対し、長登木簡では記されていない。

したがって、両者は同種の木簡ではないと考えられる。(5)は上端に切込みのある付札。片面には「出雲豊國」と人名を書く。もう片面にも一部に墨書きはあるが、表面は整っており文字を削除したような痕跡は認められない。

(6)は上端が方形で、下端は左右の角が切り落とされている。墨痕は薄く、部分的に残るのみである。表側最初の三文字は文字の一部しか墨が残っていないが、残画から「左六龜」と読める。裏にも文字の一部が若干確認できるが、解説するには至らない。(7)は右側面と下端が折損している。左上角の一部が欠けているが、当初は短冊形だったと推定される。習書木簡で、墨痕は濃い部分と薄い部分があり、墨色の違いや文字の重なり具合などから二度以上にわたる習書がされたと考えられる。「菩薩」「卷」「第」などの文字から、経典の題名などを書いたものと推定されるが、併出した他の木簡とはやや内容的に異なるものであり、現業部門の事務担当者として経師などが充てられていた状況も想起される。

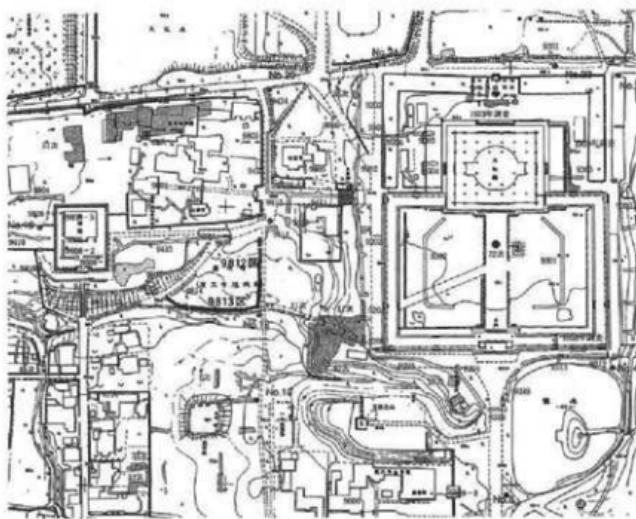
2001年出土の木簡

#### 9 関係文献

奈良県教育委員会「東大寺防災施設工事・発掘調査報告書」(一)

〇〇〇年

(1-7・9 平松良雄、8 鶴見泰寿)



調査地位図

奈良・藤原宮跡

1 所在地	奈良県橿原市高殿町
2 調査期間	第一〇七次調査 二〇〇〇年(平12)三月一一日
3 発掘機関	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者	代表 黒崎 直
5 遺跡の種類	宮殿・集落跡
6 遺跡の年代	古墳時代・鎌倉時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	調査地は、藤原宮朝堂院の東第一堂北半と回廊の東北隅部にあたる。戦前に日本古文化研究所によって部分的な調査が実施されているが、約三一四〇m <sup>2</sup> にわたって面的に再調査した結果、建物構造に関する多くの知見を得ることができた。とくに東第一堂SD九一〇〇について、日本古文化研究所の調査結果とは異なつて、柱建物ではないことを明らかにした点は、諸宮の朝堂の変遷を考える上で重要な成果である。また、藤原宮跡以外の遺構も多段検出しており、調査区の西半部では、掘立柱建物・井戸・溝など、中世集落に関わる遺構が顕著であった。

木筒は、次の三カ所から計二点(うち削削一点)が出土した。

- (2) 一。  
SD九〇四六  
SD九〇四〇

(82)×(26)×3 065

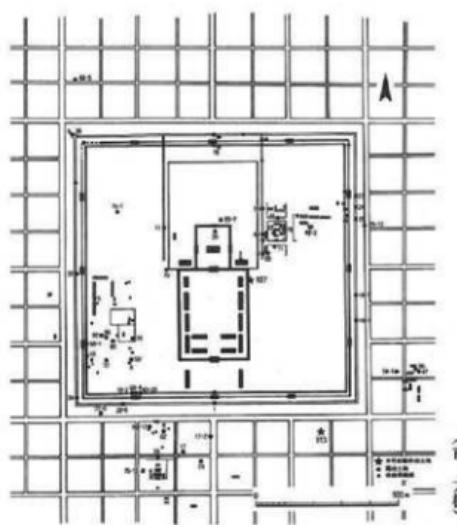
第一は、藤原宮直前期の先行四条大路南側溝SD九〇〇五である。幅一・五m深さ一m以上の素掘溝で、木筒が一点出土した。五文字程度の墨痕が認められるが、訛説は困難である。

第二は南北溝SD九〇〇四〇である。朝堂院の東面回廊東雨落溝の下層にある素掘溝で、幅約七〇cm深さ約二〇cm。暗灰色の粘土が堆積し、藤原宮造営に伴う木材のはつり屑とみられる多量の木屑を含む。削屑がその中から一点出土した。この溝は黄褐色の粘質土で埋められ、その後同位置に東雨落溝が造られる。

第三は、平安末期から鎌倉時代にかけての南北溝SD九〇〇四六であり、木筒が一点出土した。当該期の中世遺構は、大きくA・Bの二期の変遷が認められるが、B期のものである。SD九〇〇四六は南北溝SD九〇〇四四と平行し、その間には相互を連結する複数の東西溝があり、梯子状の溝群を形成している。かつて東面回廊があった場所の耕地化に關わる溝群であつたと推定される。

8 木筒の訛文・内容





(2)は上端に穿孔が二つ認められる。左割れの木簡であるが、孔の場所は、一つがほぼ真ん中、もう一つは左端で半円となっている。下端が折れているが、意図的なものか。木簡の内容・用途は不明。

9 年  
奈良文化財研究所「奈良文化財研究所紀要二〇〇一」(二〇〇一  
同「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報」一五(二〇〇二年)

## 奈良・藤原京跡左京二条二坊



(桜井・吉野山)

1	所在地	奈良県橿原市醍醐町・高殿町
2	調査期間	第一〇九次 一〇〇〇年(平12)八月一~〇月
3	発掘機関	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4	調査担当者 代表	黒崎 直
5	遺跡の種類	都城跡
6	遺跡の年代	古墳時代・藤原宮跡前後・中世以降 遺跡及び木簡出土遺構の概要
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	調査地は耳成山の南東、左京二条二坊西北坪に位置し、西辺は東一坊大路東側溝にかかる。公衆浴場店舗建設に伴い、一六〇〇年を発掘した。

検出遺構のうち藤原宮跡前後に属するものとして、  
掘立柱建物二八棟、掘立柱  
塀、井戸等がある。比較的小規模な掘立柱建物が散在する点が特徴といえる。  
遺構は方位や重複関係から四時期に細分できる。木

筒が出土したのは第一期に属する井戸 SE 九一四九である。素指の井戸で、直径約一m、造構検出面から井戸底部までの深さは一・五m以上。調査地北部に東に向く「コ」字状に並び立つ小規模建物三棟によつて取り囲まれており、これらの建物に伴うものであろう。井戸埋土中より、飛鳥 IV-V に属する土師器、須恵器が出土した。木筒は堆積層下層の黒灰色粘土層から、木片、骨片、籠繩物の断片などとともに三点が出土した(「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木筒概報」一五では井戸 SE 九一四七から木筒一点が出土したと報じているが、木筒ではないことが判明した)。

#### 8 木筒の内容・积文

いずれも削屑の細片であり、解読できない。

#### 9 関係文献

- 奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木筒概報』一五  
(1991年)  
同『奈良文化財研究所紀要』100 (1991年)

(竹内 亮)

# 奈良・藤原京跡左京六条二坊・七条二坊

ふじわらきょう

所在地 奈良県橿原市高殿町

調査期間 第一、二、三次調査 一〇〇一年(平13)一月～四月

発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査担当者 代表 黒崎 直

遺跡の種類 都城・集落跡

遺跡の年代 古墳時代～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

近世の溜池である「高所寺池」堤防改修工事に伴う事前調査である。藤原京の六条大路と東二坊坊間路の確認、左京七条二坊西北坪

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主

の遺構検出を目的とした主



(桜井・吉野山)

検出した主な遺構は、藤原宮跡の六条大路と東二坊坊間路、左京七条二坊西北坪内の東西溝・井戸・掘立

柱壇・埠立柱建物、古墳時代の溝、鎌倉時代の石組井戸・土坑・溝などである。六条大路の幅に関して、これまで側溝心々間距離で二一四mと一六m説の二説があったが、今回の調査では一六・二mという数値を得ている。

木簡は、一三世紀後半の石組井戸SE九三一八から一点出土した。

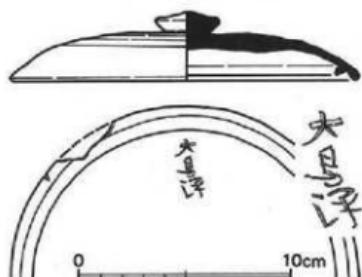
この井戸は、掘形上面で長径二・八m短径一・五mで、検出面から井戸底まで一・九mある。井戸底から高さ一・二m程は川原石を円形に積んだ石組みが残存していた。主な出土遺物は、瓦器などの土器類と木製品（曲物、柄杓、独楽などの未製品）である。

そのほか文字資料として、東二坊坊間路西側溝SD六〇三一Bから、飛鳥IVの須恵器杯B蓋の裏面に「大島評」と鏡書きされたものが出土している。SD六〇三一Bは最大幅一・六m、深さは最も深いところで八〇cmある。浅い部分では下層に流水堆積があり、多量の土器が出土した。「大島評」土器もそのひとつである。須恵器の鏡書き文字には生産地の地名が記されることがあるため、この須恵器は大島評（後の和泉国大島郡）で生産されたものと考えられる。今回の木簡とは年代が異なるが参考までに記した。

#### 8 木簡の篆文・内容

(1) 「 」「 」「 」「 」「 」

45×(11)×11  
015



参考 「大島評」鏡書き土器

左割れ。側面に穿孔を施したものであるが、考課木簡の類ではなかろう。

9 関係文献  
奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要』100-1 (100-1)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一五 (100-1年)  
(市 大樹)

## 奈良・いしがみ 石神遺跡

1	所在地	奈良県高市郡明日香村飛鳥
2	調査期間	一 第一三次調査 一〇〇〇年(平12) 一〇月 二 第一四次調査 一〇〇一年一月、二月
3	発掘機関	奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4	調査担当者	代表 黒崎直・田辺征夫
5	遺跡の種類	宮殿関連遺跡
6	遺跡の年代	飛鳥時代
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	石神遺跡は飛鳥寺の西北、水落遺跡の北に接する。七世紀を中心として、計画的に配置された建物群が稠密に分布する。特に七世紀中期を経て、大宝令大尺で五〇〇尺、小尺で六〇〇尺を測る地點に、存続時期の異なる二条の東西掘立柱塀(SA三八九三、SA三八九五)が検出され、遺跡北限が確定した。二条の塀のうちより古いSA三八九三には、外側(北側)に遺跡最大の幅を持つ東西石組溝SD三八九六、内側(南側)にやや小規模な東西石組溝SD三八九一が並行する(A3期)。SD三八九六は次の段階でいたん埋立てられ、やや幅が狭く底石を敷く石組溝SD三九五〇が同位置に設けられる(A3-1期)。その後、塀が北側に移設される(SA三八九五)のに伴い、南側の溝SD三八九一も石材を抜き取られて南北溝が取り付くが、周辺遺構の変遷に伴い、南北溝も数回にわたり複数回にわたって付け替えや改修が行なわれた。なお、調査地内におけるA期

見された東南の地点を皮切りに一九八一年に調査が開始され今回で一三次・一四次目となる。

調査地は石神遺跡の既往の調査区では最北部に位置している。從来の調査では、水落遺跡との間を区切る遺跡南限の東西塀が確認されているものの、対応する北限の塀が以北の調査区では見つかっていないことから、遺跡北限の検出が期待された。以下、一三次・一四次調査の成果をまとめて検出遺構の概略を記す。

七世紀前期・中期(A期)。從来知られていた遺跡南限の東西塀(SA六〇〇から、大宝令大尺で五〇〇尺、小尺で六〇〇尺を測る地點に、存続時期の異なる二条の東西掘立柱塀(SA三八九三、SA三八九五)が検出され、遺跡北限が確定した。二条の塀のうちより古いSA三八九三には、外側(北側)に遺跡最大の幅を持つ東西石組溝SD三八九六、内側(南側)にやや小規模な東西石組溝SD三八九一が並行する(A3期)。SD三八九六は次の段階でいたん埋立てられ、やや幅が狭く底石を敷く石組溝SD三九五〇が同位置に設けられる(A3-1期)。その後、塀が北側に移設される(SA三八九五)のに伴い、南側の溝SD三八九一も石材を抜き取られて南北溝が取り付くが、周辺遺構の変遷に伴い、南北溝も数回にわたり複数回にわたって付け替えや改修が行なわれた。なお、調査地内におけるA期

の建物はいずれも小規模である。

七世紀後期（B期）。調査地の状況は一変する。全体が整地土で覆われ、東西塁、東西溝が消滅する。それまで南北溝が流れていた位置には掘立柱南北塁SD一四九〇が設けられ、塁の西側には長大な桁行をもつ大規模建物が配置される。

七世紀末期（C期）。B期の大規模建物が消滅し、南北の素掘溝SD一三四七AとSD一四七六が貫通するのみとなる。西側のSD一三四七Aは後に改修され、側石が設けられる（SD一三四七B）。

木簡は、一三次調査ではA期の溝SD三八九六の埋立土から一点出土した。一四次調査ではC期の溝SD一三四七Aの堆積土から八点（うち崩落七点）、同溝の埋立土から一点出土した。

## 8 木簡の叢文・内容

### 一 第二三次調査

#### SD三八九六

(1) 「」……〔平カ〕

(103+28)×25×4 032

SD一三四七A（堆積土）

(1) は2片に分離して出土した。材質と形状から同一の木簡であることは確実だが、中間部に欠損があり接合しない。墨痕の残りが懸

く、人名かと思われる表記が一部確認されるのみ。

(1) は「和名抄」には、同名のサトとして、武藏國久良郡諸岡郷がある。

六文字目以下は人名か。(2)は習書か。一文字目と二文字目は

### 二 第一四次調査

#### SD一三四七A（堆積土）

「諸岡五十豆」〔田皮カ〕

126×21×3 011\*

〔〕〔カ〕

(75)×19×4 081

日

(31)×(9)×5 081

〔毛カ〕

091

□九

091

□米

091

徳

091

有

091

(8)

091

(7)

091

SD一三四七A（堆積土）

・「」〔評カ〕

・「」〔佐<sup>ノ</sup>マ〕

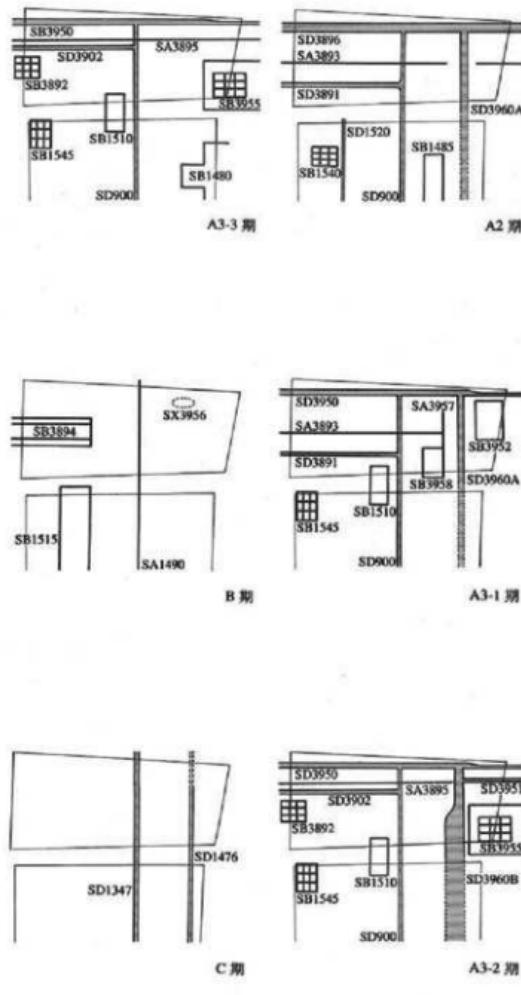
・「」〔儀〕

(130)×22×3 033

同字とみられる。(9)は表面の腐朽が進み判読が難しい。評制史料であろうが、サト表記は確認できない。  
9 関係文献  
奈良文化財研究所「奈良文化財研究所紀要」(1991年)

同「奈良文化財研究所紀要」(1991年)  
同「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報」一五(1991年)  
同「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報」一六(1991年)

(竹内亮)



遺構実測図

奈良・飛鳥池遺跡

あすかいけ



(吉野山)

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥  
2 調査期間 一 第九八次調査 一九九九年(平成11年)四月~九月  
二 第一二二次調査 二〇〇〇年一二月~二〇〇一年三月  
3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部  
4 調査担当者 代表 黒崎 直  
5 遺跡の種類 生産遺跡・寺院跡  
6 遺跡の年代 古墳時代~平安時代  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡は、飛鳥寺の東南から「人」字形にのびる東西二つの谷に面した丘陵斜面に展開する。遺跡の南には酒船石遺跡が隣接し、さらに西南には飛鳥京跡が立地する。遺跡の中央付近には、北へと下つてきた谷を堰き止める形で東西塚(二

時期にわたる)が築かれ、この塚を境に南北二つの地区に分かれる。北地区では石組みの井戸・方形池・導水路、建物、壁などがあつたり、建物規模も大きい。南地区では、東西二つの斜面に大規模な工房群が展開し、北地区とは様相を異にする。なお飛鳥池遺跡では、これまで四度の調査(一九九九年の調査、第一一二二次調査(一九九九年)、第二二次調査(二〇〇〇年)、第三二次調査(二〇〇一年))で八〇〇〇点近くの木簡が出土している(本誌第一四・二二号)。

一 第九八次調査

南地区では、「人」字形にのびる谷の両岸を雑壟状に造成し、業種別に工房を配置する。東の谷SD-200では、第九三次調査で、銅・鉄・富本錢などの工房の存在が判明した。第九八次調査はそれを受けたもので、第九三次調査区の東南部で検出された炉跡群の一部と、第八七次調査東区を含む形で調査区を設定し、炉跡の広がりと富本錢鋳造に関わる遺構・遺物の発見を目指した。調査面積は約二二〇〇m<sup>2</sup>。

検出した主な遺構は、炉跡、炭層、土坑、工房を区画した掘立柱塀、陸橋、斜行溝などである。

木簡は次の五カ所から、計二六点(うち削崩九点)が出土した。

土坑SK-223は、直徑約二〇cmの円形状で、真土製錢范や富本錢断片・鉄棹・環・バリ・溶銅・ルツボ・羽口・銅滓など、富本錢を鋳造する際に生じた廃棄物が一括投棄されていた。木簡七点(うち

削層六点)が出土したが、積成はできない。

斜行溝SD二〇四は谷筋に平行して南東から北西に流れる。上幅一~二mで、深さ三〇~五〇cmの素掘溝である。陸橋SX二〇二・二〇八・二二〇の北端を縦断し、水溜SX二二一に注ぐ。溝の下層から木簡が一点出土した。

陸橋SX二〇八瓶の炭溜から木簡一点が出土している。今回、六条の陸橋を検出したうちのひとつ。本遺跡では谷の流れに直行した陸橋を複数築き、谷を棚田状に造成することによって、工房から排出された炭や灰・失敗品などの廃棄物を順次沈殿させる仕組みがとられていた。

谷筋とその両岸には、工房から投棄された大量の炭層が堆積していた。とくに、北東岸の工房跡から谷筋に向かう斜面には分厚く炭層が堆積しており、最大厚さ1mにも及ぶ。この炭層から計六点(うち削層一点)の木簡が出土した。

東の谷SD二〇〇堆積層からは、木簡二点(うち削層一点)が出土した。

## 二 第一二二次調査

「人」字形にのびる谷のうち、東側の谷筋は全長二五〇m近くに及び、銅・鉄を中心とした工房群が展開する。最奥部には、酒船石遺跡の龜形石槽が所在する。第一一二二次調査は、東の谷筋における工房の南限の解明と、近接する酒船石遺跡との境界の把握を目的と

したもので、調査面積は一八一〇m<sup>2</sup>。

調査の結果、丘陵西斜面の上下二段のテラスで、古墳時代の斜行溝・南北溝、古墳時代以降・飛鳥池工房跡以前の石組遺構、飛鳥池工房期の炉跡や廃棄物層などを検出した。また調査区西の谷部は、平安時代の遺物を包含する腐植土層が覆っていたことが判明した。

この腐植土層は、谷に繁茂した草木によって形成されたものであり、谷が沼沢もしくは湿地と化していたことを示している。この場所は亀形石槽の下流にあることから、そこから流水した水流を人工的に調整する水溜施設が、沼沢もしくは湿地と化した可能性がある。

この腐植土層の下層から木簡が一点、自然木・植物種子・板状木製品・黒色土器などとともに出土した。

## 8 木簡の内容・積文

### 一 第九八次調査

#### 斜行溝SD二〇四



- (1) 隆橋 S×10×8 桐原著  
「 桑原五十戸」
- (2) 「 尔 [窓カ]」
- (3) 岩扇  
「 次評新野五十戸」  
〔新野五十戸〕  
〔部カ皮カ〕
- (4) 「 依地評都麻五十戸」  
〔依地評軍布〕
- (5) 「 [アカ]」
- (6) 谷 S×10×8 桐原著  
「 高志 新川評  
「 石背五十戸大 [日]」  
〔石背五十戸大〕  
〔日〕
- (7) 「 [若佐カ]」  
「 [利]」
- (8) 「 [窓カ]」
- (9) 不□ 路  
「」
- 158×31×3 031\*
- 147×34×3 031
- 135×24×6 032\*
- 204×32×6 031
- (10) 100×(26)×3 081  
「」
- (11) 36×(21)×3 061  
「」
- (12) 36×(21)×3 061  
「」
- (1) は習書木簡。下端は刃物を入れて折っている。(2)の「桑原五十戸」は複数の候補があり、特定はできない。裏面の三文字目は「窓」と読んだが、いびつな字体である。(3)(4)はともに讃岐国からの荷札木簡。(3)の「次評」は後の周吉牒、(4)の「依地評」は後の隨地牒。「評一里」制より一段階古い「評一五十戸」制の表記がとられている。
- (6) の「高志」は越のこと。「新川評石背五十戸」は後の越中国新川郡石勢郷。これまで越國の越前・越中・越後への三分割の時期は、天智七年（六六八）から持統六年（六九二）までの間であると考えられており、「評一五十戸」表記は、この問題を考える上で注目される。たゞ、「高志」の次の文字は「国」と読んだが、墨痕はわずかであり確実ではない。なお、藤原京跡左京一条坊西南坪から朱雀大路にかけての調査で、七世紀後半には頃の三間×三間の柱建物の柱掘形から「高志闕」と書かれた荷札木簡が出土している（奈良県立橿原考古学研究館附属博物館「大和を掘る」一九）。

(7)の「仍利」は海藻のノリのことか。(8)は上折れ・右側の習書

木簡。下端には両面に焼けこげがわたらる。表面は「まだれ」の文字を習書している。裏の二文字目は「染」ないし「深」のよう見える。

(9)は上下ともに折れ・左側で、内容も不明。

出土木簡のうち、内容・形態から荷札・付札と推定できるものが九点ほど、木簡状木製品も一点ありまとまっている。これは第九三次調査と同様の傾向を示している。

## 二 第一二二次調査

(1) 腹黒黒〔所召者倍

〔大方〕  
〔勘カ〕  
□□問其由□

〔等奈カ〕  
〔奈カ〕  
□□太□□□太□

(97)×(23)×3 019

内容的に習書木簡と考えられるが、上端を斜めに切り折って廢棄する。表面の「所召」は「麻呂」の可能性も考えられるが、「麻」とした場合、第一画がないのが難点。一行目の「勘問其由」とあわせて、某所(「大」)は「丸」の可能性もある)に召して勘問するという場面を想像させるが、不確定。裏面の「奈」も「東」の可能性を含めて検討を要する。

## 9 関係文献

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所年報」(1990—II)(1990年)

同「飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概報」一五(1990年)  
(市 大樹)

## 京都・長岡京跡

ながおかきょう



(京都府西南部)

- 1 所在地 京都府長岡京市神足四丁目
- 2 調査期間 右京第七一三次 二〇〇一年(平成13)八月~九月
- 3 発掘機関 財長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(七八四年~七九四年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
調査地は右京七条~坊七町に位置し、南は七条三条間小路に面する。調査区は東西約四m南北約三三m、調査面積は約一三三m<sup>2</sup>。検出遺構は据立柱建物・素掘溝・石組護岸溝などがある。
- 8 木簡の収集・内容
- (1) 「用錢四百七十三文 搶十六村 直錢 (241)×15×4 019  
(2) 「□□令令令令□□」 (155)×(6)×(16) 081  
(3) 「久米 □白 □」 (75)×20×4 039  
(4) 「□□□」 (92)×(19)×4 081
- 品(土師器等漆器底部の再加工土製品)が出土した。  
石組護岸溝SD-1-2は、北側のみ石組で護岸しており、北側の立て条件の悪さによると考えられる。一部、南への張り出しがあり、張り出し南端部には杭列による区画や堰が設けられていた。張り出し南端部の杭列によるL字型区画の区画内には漆が敷き詰められ、洗い場と考えられる。なお、南肩部分の杭列には小枝が絡ませてあり、しがらみ構造になっていた。溝最上層からは、平安時代の須恵器・土師器・綠釉陶器などが出土し、平安時代に完全に埋没したと考えられる。
- 木簡はすべてSD-1のしがらみ付近から出土した。他に、黒色土器を含む各種土器類、人形・糸巻など木製品、長岡宮・京内で二例目となる平城宮六三~三D型式の軒丸瓦などが出土し、「入」「東」「上」と書かれた墨書き土器も出土している。



(1)は板目材で、上端は切り折り。博十六村を購入する直線を記している。「博」と記した木簡は平城宮第三九次調査や、長岡京左京第二〇三次調査でも出土している(本誌第二号)。(2)は分厚い板目材を板目取り板に小分けにされたものか。留書簡と考えられるが、呪符の可能性もある。(3)は板目材の荷札木簡で、品目は白米か。「久米」は郡とすると美作・伯耆・伊予、郷とすると大和国高市郡・伊勢国員弁郡・遠江国磐田郡が知られる。(4)は上端は表裏両面から削つて切断している。縦に半裁されている。墨痕が看取できるにとどまり、判読できなかつた。(5)は板目の面を持つ削屑。

なお、訛説にあたっては京都産業大学の井上満郎氏、向日市の清水みき氏・国下多美樹氏・中島信親氏ほかのご教示を得た。

(岩崎 雄)



## 大阪・上津島遺跡



(大阪西北部)

5 遺跡の種類 集落跡  
6 遺跡の年代 古墳時代中期・一二世紀・一三世紀  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
調査地點は遺跡エリアの西端に位置する。周辺での試掘所見から、遺跡東部とは別の微高地上に立地するとみられる。遺構は古墳時代中期と一二・一三世紀の集落、中世集落直前の水田遺構がある。

木簡が出土したのは、中世集落に伴う素掘り井戸とみられる土坑である。全体の約二分の一程度が調査対象となり、南北一・二五m深さ約七〇cmを測る。底部に暗灰色粘土の堆積があり、木簡はその直上から植物遺体に混じつて瓦器皿などとともに出土した。共伴遺物より一三世紀前半頃の所産と考えられる。

- 1 所在地 大阪府豊中市上津島三丁目
- 2 調査期間 第五次調査 一九九三年(平5)三月一六月
- 3 発掘機関 上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 服部聰志
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代中期・一二世紀・一三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
調査地點は遺跡エリアの西端に位置する。周辺での試掘所見から、遺跡東部とは別の微高地上に立地するとみられる。遺構は古墳時代中期と一二・一三世紀の集落、中世集落直前の水田遺構がある。
- 8 木簡の収文 内容  

(1) □□物忌昔群民将来之子孫〔宅ガ〕門也急々如律令

上端は主頭、下端は漸次幅を減じながら先を尖らせる。表面の風化が著しく文字は判読し難いが、一部はレリーフ状に浮き出ている。
- 9 関係文献  
上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会「上津島遺跡第五次発掘調査報告」(一九九七年)

木簡の写真



(服部聰志)

## 兵庫・六条遺跡



(大阪西北部)

6 遺跡の年代 弥生時代～近世  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
六条遺跡は六甲山南麓の段丘面から扇状地に位置する遺跡で、芦屋川西岸にある。区画整理事業に即して、一九九九年から順次調査を実施している。弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であるが、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が中心である。そのうちの一地点で木簡が出土した。

- 1 所在地 兵庫県芦屋市清水町
- 2 調査期間 一 一九九九年（平11）一一月～一二月  
二 一〇〇〇年四月～六月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 渡辺昇・川村慎也
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
六条遺跡は六甲山南麓の段丘面から扇状地に位置する遺跡で、芦屋川西岸にある。区画整理事業に即して、一九九九年から順次調査を実施している。弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡であるが、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構が中心である。そのうちの一地点で木簡が出土した。

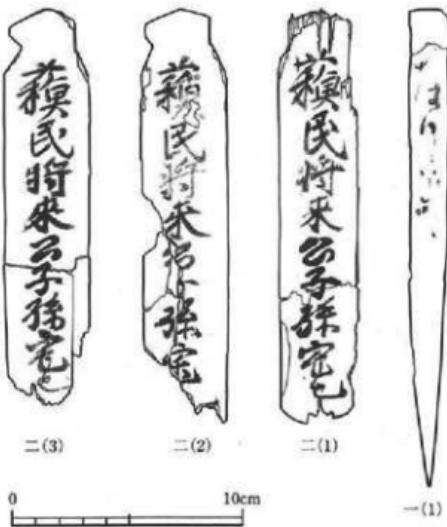
一九九九年調査区は、神戸市との市境に接した地点で、土石流によつて安定した面に集落を営んでいた。北側には掘立柱建物跡が数棟ある。「一世紀後半の大型の落ち込み（SXO-1）から木器・土師器・須恵器・瓦器などとともに木簡が一点出土した。  
一〇〇〇年調査区は、一九九九年調査区の南側に位置し、園池を伴う掘立柱建物跡を検出した。遺構が調査区外へ延びている」とから建物の規模は不明である。その北で池跡を検出した。池は州浜を伴い、外形は不定形で瓢箪形に近い形状にならうかと思われる。州浜・池底の石敷は拡大の円礫主体で、花崗岩はほとんど使わず、粘板岩などを選んで使用している。導水部分も確認している。

建物の北西隅部にあたる可能性が高い柱穴の掘形内から三点の蘇民将来札が出土した。他に瓦器・土師器の破片が出土している。池内にも多くの土師器・須恵器・瓦器が投棄されていた。京都系の土師器皿が多数含まれている点は注目される。

- 8 木簡の叢文・内容  
一 一九九九年調査区

(1) 「□はり□□」

一片が接着し、側部の一部を欠損する。頭部は平たくしており、下部は鋭く尖らせる。



一一〇〇〇年調査区  
(1) < 蔡民将来公子孫宅也

(2) 「< 蔡民将来公子孫宅 □ [也々]」

(3) 「< 蔡民将来公子孫宅也」

(181)×34×4 0.39

(180)×39×4 0.39

(1)は上下部ともに欠損しているが、ほぼ完存に近い状態と思われる。頭部は両側から切り込みを入れている。  
(2)は上部の状態は良好だが、下部は欠失している。墨は明瞭である。  
(3)は頭部の切り込みが深い。下部わずかに欠損している。

#### 9 関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成一一年度年報』  
(一〇〇〇年)  
同『平成二二年度年報』(一〇〇一年)

(渡辺昇)

# 兵庫・明石城武家屋敷跡

あかしよじょうぶけやしき

所在地	兵庫県明石市東仲ノ町
調査期間	一九九九年(平11)四月~八月
発掘機関	明石市教育委員会
調査担当者	渡辺昇・高木芳史(兵庫県教育委員会)
遺跡の種類	城下町跡
遺跡の年代	近世
遺跡及び木簡出土遺構の概要	明石城は小笠原忠政(忠真)が明石藩主として転封されたことに伴って、元和三年(一六一七)から構築された。それに伴って地形の低い南側一帯に城下町が整備された。今回調査したのは南石東部分の東中ノ丁(文久絵図による)に相当する地域で、平成八年度から継続して調査している。比較的調査面積が広く、道部分の調査が実施できたことから、江戸時代の屋敷割り



(明石・須磨)

文字資料がある程度明らかになった。屋敷跡や門の検出から、文久年間の絵図との比較もでき、出土遺物の中に焼き絞ぎ時の文字が残っていることから、屋敷名やその広さ、位置が確定できるようになった。

文字資料が出土した遺構は、(1)~(2)は松本家に当たり、(1)(2)は屋敷地南側の池から出土している。池は近代になって廃棄場所となつたようだ、その中から出土している。(3)は市川家に位置する地点で、北側部分の落ち込みから出土している。

また、三好家に相当する屋敷中央の井戸から、「中宋」の焼印が押された円形容器の蓋が出土している。四枚の材からなり、接合は木釘によっている。中央や右側に焼印が施されている。厚いところから通常の曲物の蓋ではないと思われる。(3)に近接する溝から、焼印で記号が押された、栓か工具の歯と思われるものが出土している。歯部分は断面四角であるが頭部は断面方形である。同地点から数本の同形の遺物が出土しているが、他には焼印は存在しない。

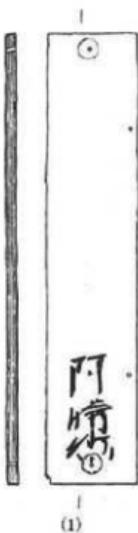
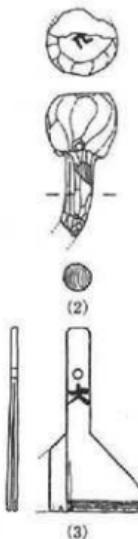
## 8 木簡の模文・内容

池野(松本家)

- (1) 「。阿□□。」  
(2) 丑

360×72×8 011  
横57×長(114) 061

落ち込み(中川家)



(3) 「。大」  
146×78×5 561  
 9 関係文献  
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「平成一一年度年報」  
 (1000年)  
 明石市教育委員会「平成一一年度文化財年報」(1001年)  
 (渡辺昇(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所))

(1) (2)

(1) (2)

(1)は完存に近い板材で上下に留めた孔が認められる。右側側部にも穴が二ヵ所存在する。(2)は桿の頭部に凸の記号が墨書きされている。頭部が大きく断面は円形である。(3)は刷毛本体で、ハケ部は残存していない。柄中央に凹孔があり、その下に墨書きで記されている。刷毛は継方向に割って挟み込むものである。

兵庫県城崎郡日高町発行

「但馬国府と但馬国分寺  
—発掘調査からその謎に迫る』の刊行

但馬国府・国分寺の発掘調査成果をビジュアルにまとめた  
『但馬国府と但馬国分寺　—発掘調査からその謎に迫る』が、  
木簡学会但馬特別研究集会にあわせて刊行された。遺構・遺物  
の写真・解説の他、古地図などの関係資料も総合的にを集められ  
ている。木簡もカラー写真で多く所収され、墨書き器の写真も  
収められている。

A4版 総カラー六四頁 二〇〇一年七月刊行

価格二二〇〇円（送料三一〇円）

申込先

日高町教育委員会社会教育課

兵庫県城崎郡日高町桜布九二〇

TEL 〇七九六一四二一一一（代）

FAX 〇七九六一四二一〇四



(播州赤穂)

## 兵庫・赤穂城跡二の丸

1 所在地	兵庫県赤穂市上坂屋字東組
2 調査期間	二〇〇〇年(平12)四月一~二〇〇一年三月
3 発掘機関	赤穂市教育委員会
4 調査担当者	中田宗伯・味香英相
5 遺跡の種類	城郭跡
6 遺跡の年代	江戸時代
7 遺跡及び木筒出土遺構の概要	赤穂城は、正保二年(一六四五)に常陸国笠間(現在の茨城県笠間市)から入封した浅野長直が、近藤三郎左衛門正純に築城設計を命じ、慶安元年(一六四八)から寛文元年(一六六一)まで二三年を費して完成させた城である。その構張は甲州流軍事によつてなされたといわれ、本丸と二の丸の関係は輪郭式であるが、二の丸と二の丸は梯郭式に配し、櫓一〇カ所、門一二

力所、折形五カ所を設けて防備の要としている。なお城の立地は、難見川(現子穂川)が形成した三角州の先端であり、典型的な平城であるとともに、「往時は海に面していたので海城とも言える」。

この城を築城した浅野家は、元禄一四年(一七〇一)、江戸城中の刃傷事件によって断絶し、その後は永井家を経て森家の居城となつて明治の廢藩置縣を迎えた。廢藩後に城郭建物も順次取り壊され、城内の大部分は田畠化あるいは宅地化されていったが、一九七一年の国史跡指定後は赤穂市によつて指定地内の公有化が図られるとともに、発掘調査と整備事業が進められている。

木筒は、二の丸北西部の池泉を中心とした庭園の下層から検出された素振りの溝状遺構から出土した。この遺構は、現状では幅五~六m深さ〇・九mを測り、その法面は綾やかな弧を描く。護岸などの施設は持たず、落ち込みあるいは旧流路に若干手を加えたような溝状遺構である。溝内堆積土の最上層付近に植物腐植層が認められ、この層の上面には根・箸・下駄・木片などの多量の木製遺物が投棄されており、二点の木筒はこれらの木製品に混じって出土した。植物腐植土は溝が開放状態にあつた時期に、底部に形成された停滞堆積物で、この層より上は二の丸造成のために人為的に投入された砂層である。よつてこの素振り溝状遺構は、二の丸造成の過程で埋め立てられたものと推定できる。

## 8 木簡の积文・内容

- (1) 「大石又太良殿參 賴母」  
「大いしたのも殿御内 おかのとのまいる

170×29×2 033

木村惣兵衛

266×23×4 032

- 「大いしたのも殿御内 おかのとのまいる

(1)は完形品で、上端の左右に切り込みを入れ、下端はやや尖らせ  
る。「賴母」から「大石又太良」へ宛てた木簡である。「賴母」とは  
大石内蔵助良雄の大伯父にある大石賴母助良重のことである。家  
老職にあつた賴母助は港主浅野長直に特に重用され、二の丸内に唯  
一屋敷を下賜され、その娘を妻に娶った。「大石又太良」は賴母助  
の早世した男子「又太郎」と推定される。

(2)は「木村惣兵衛」から大石賴母助屋敷内の「おかの」に宛てた  
木簡と推定される。両名とも他史料で該当する人物を確認すること  
ができるので、その詳細については不明というほかない。

今回見つかった木簡は年紀の記載はないものの、その出土状態よ  
り浅野長直が赤地に移った正保一年から赤穂城の完成した寛文元年  
までにその年代を限定することができる。木簡にはいずれも大石賴  
母助本人やその屋敷に關連する人名が見られ、二の丸にあつた大石  
賴母助の屋敷から不用になつた桶・下駄・箸などの木製品、陶磁器  
類とともに当時まさに城普請の過程にあつた屋敷裏手に投棄された

遺物群と考えることができる。

なお、木簡の积文にあたつては、赤穂市立歴史博物館の小野真一  
氏の教示を得た。

## 9 関係文献

- (1) 赤穂市教育委員会「赤穂城跡二の丸庭園鋪帯池発掘調査概要」  
(1991年)

(中田宗伯)



(1)



(2)



(名古屋市北部)

K 区 N R O 七は、古墳時

## 愛知・志賀公園遺跡

しがこうえん

- 1 所在地 愛知県名古屋市北区中丸町三丁目
- 2 調査期間 一九九六年(平成8年)四月～一九九九年三月
- 3 発掘機関 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財
- 4 調査担当者 永井宏幸・小川芳範ほか
- 5 遺跡の種類 集落跡・自然流路
- 6 遺跡の年代 弘生時代中期～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

志賀公園遺跡は、名古屋市の東北部から東南部にむけて流れる庄

内川とその支流である矢田川の合流地点から南へ約  
2km、矢田川の左岸に形成された沖積地に立地し、標高は現況で5m前後である。

弘生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。

木簡の出土した流路九八

K 区 N R O 七は、古墳時

代後期、古代下層(岩崎一七号窓式期)、古代上層(岩崎四一号窓式期)の三層からなり、このうち、木簡の出土した層位は古代上層である。木簡以外の文字資料としては、墨書き器が古代上層から一点(須恵器杯)出土している。古代の上下層から出土した木製品には祭祀具が多数含まれ、この付近で祭祀が行なわれたことを示唆する。但し、上・下層では遺物の組成が異なる。上層では葦串と馬形に限られるのに対し、下層では葦串・舟形・木鐘形などが出土する。又、豊富に出土する須恵器も、上層では有口杯(杯B)が出土するが、下層にはみられない。こうした遺物群の変化の要因には、古墳時代以来の祭祀から律令的な祭祀への移行が考えられる。

古代尾張国における官衙相当施設は明らかになっていない。志賀公園遺跡は、出土遺物からみて、庄内川と矢田川の合流地点に接する、官衙的施設を備えた河川交通の要所と考えられる。

### 8 木簡の収文・内容

- |                    |          |                  |
|--------------------|----------|------------------|
| (1) 「□磨 □□□ □□□ 秦人 | (2) <□□□ | (3) 「六束」<br>〔羽書〕 |
| [人か]               |          | 奈女□首□□           |
- (39)×227×6 961  
(376)×224×7 965
- ・「□□□□□

(4)

「五束

〔依カ〕〔里カ〕

(120)×(36)×5 019



(82)×43×3 019

(6) □□□刀□□□□□號斗…□年□□□□□ (144+144)×(22)×3 081



(82)×43×3 019

(1) は、下端が折損し、他は、左辺の上部を除いて原形をとどめる。

上端部の方が厚く、下端にいくに従って薄く削っている。墨痕は一・二・四文字目の一部しか残存しておらず、埋没過程で他の部分の墨痕は消失し、表面の凹凸および墨痕部分が白く抜けていることにより文字として認識できる。内容は、人名と思われる記載が並び、歴名の様な木簡の可能性がある。「麻呂」は、他の文字との位置関係および大きさから判断して、一文字分の大きさで書かれている。  
「秦人」の人名は名古屋市小幡廃寺出土の刻畫瓦に類似がある。

(2) は、形代の可能性がある。上端左右にエグリによると思われる

切り込みがあり、表面は丁寧に調整するが、裏面は割つたままで未調整である。上下端は欠損する。左右辺はケズリによる原形をとどめているが、左側の整形から、馬形または刀形の可能性がある。墨痕は上端のエグリの直下にかすかに残るのみで、文字か否かは不明である。

(3) は、便宜上判読可能な多方を表とする。上端と右辺の大部が原形をとどめ、左辺と下端が欠損している。上端は表裏から刃物を入れて折り取っている。表面一・二字目は鋭い刃物状のもので文字を刻んでいる。刻書と上端整形の先後関係についてみると、刻書後に折り取られたものと判断される。内容は、「一文字目が「六」だとすると、縦の量を記している」とみられる。「奈女□首」は人名の可能性がある。

(4) は、上端、左辺が原形をとどめ、右辺、下端が欠損している。上端は表裏から刃物を入れて折り取っているが、表は一度刃物を入れてから、位置を変えて再び入れ直した痕跡がある。内容は不明であるが、縦の量を記している。一行目の一字目は「依」の可能性があるが、現状で縱画が一本不足し、やや不審。四文字目が「里」であるが、現状で縱画が一本不足し、やや不審。四文字目が「里」であるが、現状で縱画が一本不足し、やや不審。

地名を示すとともに、墨痕名の一字墨字表記が指示された和銅六年(七二三)以前の木簡である可能性がある。なお、(3)と(4)は近接して出土し、似た材を用いている。

(5) は、下端、左辺、右辺下半が原形をとどめ、上端は文字を書いた後、二次的に表裏から刃物を入れて切断している。

(6) は、六断片に分離し、上半四片と下半二片は接合するが、上半と下半は直接にはつながらない。上半の右辺は原形をとどめ、上端は文字を書いた後、二次的に表裏から刃物を入れて切断している。なお、上半部と下半部の上下の判断は、この二次的切断の上には断

片はないであろうとの推測によるものである。文字は上半部では左側一部を欠損するほかは、ほぼ一行全体が残り、下半部では右側半分を欠損する。三文字目は「秦」または「奈」、五文字目はリフトウが残り、「別」または「利」の可能性がある。下半部には「年」の文字がみえるが、その上下は数字ではない。

以上六点の木簡の内容を通覧すると、人名と思われる記載のあるものに(1)(3)の二点があり、稻束に関する記載のあるものに(3)(4)の二点、地名の記載の可能性のあるものに(4)の一点がある。なお、(2)は形代の可能性が高い。内容の推測できる木簡から考えると、人員、稻束の管理に関わって作成された木簡群である可能性があり、作成主体としては官衙が一つの候補として挙げられる。

なお、眾文は志賀公園遺跡木簡検討会（清田善吉・玉井力・福岡益志・和田翠・古尾谷）における検討および渡辺晃宏氏のご教示を踏まえ、古尾谷がまとめたものである。また、本稿の内容は「志賀公園遺跡」（後掲）一六七～一七四頁の記述に基づく。

## 9 関係文献

財愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター「志賀公園遺跡」（二〇〇一年）

(1-7 永井宏等、8 古尾谷知浩（名古屋大学）)

愛知・下懸遺跡



検出遺構は、弥生時代中期、  
墳時代前期、および奈良時代  
から鎌倉時代にまで

遺跡は、矢作川によって  
形成された沖積低地の微高  
地上に立地する。河川改修  
工事に伴い、三七〇〇mを  
調査した。

- |               |                               |
|---------------|-------------------------------|
| 所在地           | 愛知県安城市小川町下懸                   |
| 調査期間          | 二〇〇〇年(平12)一二月～二〇〇一年三月         |
| 発掘機関          | (財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター |
| 調査担当者         | 川井啓介・竹内睦・鈴木裕・皆見秀久・池本正明        |
| 遺跡の種類         | 集落跡・自然流路                      |
| 遺跡の年代         | 弥生時代～鎌倉時代                     |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                               |

が確認でき、中心となるのは弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構である。居住域と、その周辺に展開する自然流路が確認されている。自然流路からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭の木製品も出土し、その中には未製品も多数含まれる。

奈良時代から鎌倉時代の遺構は、土坑・溝などが確認されているが、分布は希薄で性格が判明しないものがほとんどである。木簡は、自然流路の上層から一点出土した。伴出資料は乏しいが、奈良時代に帰属する可能性が高い。

## 8 木簡の軽文・内容

### (1) 「春春秋秋尚尚書書律」

・「下令文文□□□是人」

(259)×24×5 636



出土した木簡は、四書五經の書名などを墨書きした習書木簡である。上端の一部と下端が折損している以外は、ほぼ原形を保つ。表面でいう「尚」と「書」との間で折れた状態で出土しているが、この部分の断面には刃物の痕跡が観察でき、キリオリによる切断であったと考えられる。木簡の裏面左側には文字面の刺離が観察できるが、この段階で生じたものであろうか。

なお、木簡の軽文などは奈良文化財研究所の渡辺見宏、馬場基、市大樹、吉川聰の各氏からご教示を得た。

## 9 関係文献

池本正明・福岡猛志「下懸遺跡出土の木簡」(愛知県埋蔵文化財センター「研究報告」第三号 1002年)

(池本正明)



(デジタルカメラによる  
赤外線撮影)

## 静岡・仁田館遺跡



(沼津)

世の柱穴群・溝・自然流路などを検出した。中・近世の陶磁器をはじめとして、柿種など多種多様な遺物が出土し、伊豆地域における土著の生活をうかがい知るうえで貴重な資料といえる。

- 1 所在地 静岡県田方郡西南町仁田地先
- 2 調査期間 一〇〇一年(平13)四月～六月
- 3 発掘機関 助手静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4 調査担当者 鈴木武之・岩本 貴
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 古代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

仁田館遺跡は、狩野川支流の米光川によって形成された微高地、後背湿地に立地する。源賴朝挙兵に貢獻したと伝えられる仁田忠

常以来、仁田氏歴代の居館として知られ、遺跡の周囲には堀と土塁が遺存している。遺跡東側の丘陵部には、国史跡の柏谷横穴群をはじめとして多くの遺跡が分布している。一〇〇一年度は、館跡の北端部を調査し、近

- 8 木簡の积文・内容
  - (1) 「妙法蓮華經授記品第六」 (3-6-1) 209×13×0.6 011
  - (2) 「妙法蓮華經化城喻品第七」 (3-7-1) 225×15×0.6 011
  - (3) 「薩宝月菩薩月光菩薩滿月菩薩大力菩薩 一へ一」 (1-1-21) 217×14×0.6 011
  - (4) 「持法緊那羅王名与若干眷屬俱有四百十」 (1-1-34) (216)×11×0.5 019
  - (5) 「若有人礼拜或復但合掌乃至」
- ・「若有人散乱心乃至以一華於供養画像漸見無數仏」
- (1-2-206) 209×13×0.8 011

「利善薩觀世音菩薩得大勢菩薩常精進菩薩」

菩

(1-1-19) 214×13×0.6 0.11

(6)

〔法華經〕  
子無知雖聞父誨猶故棄著嬉戲不已」  
(27-3-269)  
(27-3-270)

(221)×14×0.6 0.61

(8) 如無智愚人便自以為足譬如貧窮人往至親友家 九十」

(4-8-120) (219)×14×0.6 0.61

(7)

〔括弧内数字は、妙法蓮華經の巻品・行をあらわす〕

柿経は、欠損品を含め八六五枚が確認されている。片面に法華經を写経し、序品第一～授學無学人記品第九の断片が確認されている。板の形状は、上部が圭頭状で、長さ二一・五cm幅一・五cm厚さ〇・六mmを測る(いずれも平均値)。中には裏面が透けて見えるほどに薄いものもあり、いわゆる台鉢の成立以降の所産とすることができよ

う。

妙法蓮華經卷品第六

妙法蓮華經代城第ニ

菩薩日菩提月光金剛菩薩日菩提大迦葉涅槃

丁ニ

持法蓮華經卷品第十一

一

(4)

(1)

(2)

(3)

三外人承月菩薩得大勢菩薩常精進

合掌

三食弘法至三身菩薩是此身是迦葉是那迦

那迦

那迦

刺菩薩觀世音菩薩得大勢菩薩常精進

合掌

合掌

合掌

合掌

持法蓮華經卷品第十一

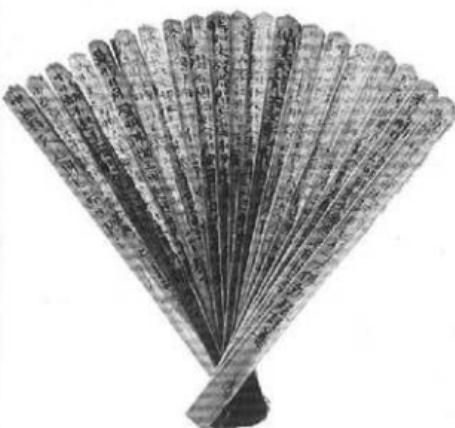
一

(8)

(7)

(6)

(5)



う。資料のうち四枚には両面に写經したものが確認されているが、いずれにも書き損じが認められることから、反対面に正しい経文を書き直したものと推測される。共伴した陶器と柿の形状から、一五世紀中葉前後の所産と推測される。

経文の順番を示す巻束番号を法華経全文を連して二〇枚おきに記すことのが特徴である。また巻束番号の表記が一部不統一であることから、(8)「一ノ二」、(8)「九十」など、手本経に記された巻束番号不統一もしくは複数存在の可能性がある。二〇枚一把のうちの一九枚目に相当する柿板に一行の経文を無理やり書き込んでいるものが存在し、(7)、柿板があらかじめ二〇枚一把にまとめてあり、写經時の書き損じや板の破損、あるいは元々板が一枚不足していたが、補充する状況になかったことを示していると推測される。したがって、それ以降の巻束番号に狂いは生していない。

柿経は現在整理中であるが、資料の評価にあたっては、奈良大学の水野正好氏、静岡大学の湯ノ上隆氏のご教示を得た。

#### 9 関係文献

- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所「こけら経 西南町仁田館遺跡」  
〔『研究所報九五』二〇〇一年〕
- 同「こけら経が大量に出土 来光川遺跡群・仁田館遺跡」〔年報一八〕〔二〇〇一年〕

(岩本 貴)

## 木簡研究第二三号

録田元一

## 委員会—木簡学会の原点—

二〇〇〇年出土の木簡

概要 平城宮跡 平城京跡左京三条一坊七坪 藤原京跡十一條・朱雀大路  
 酒船石造跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 平安京跡左京三条一坊十町 平安  
 京跡左京六条三坊六町 御室仁和寺 大坂城跡 中之島三十丁目所在遺跡  
 (鳥取藩葛屋敷跡) 広島藩大坂葛屋敷跡 加美遺跡 堺環濠都市遺跡  
 淀江北町遺跡 行幸町遺跡 桑塚跡 江子遺跡 桐ト遺跡 中村遺跡 春  
 闘遺跡群 大字重跡 若宮大路周辺遺跡群 北条小町遺跡 北条泰時・時  
 順邸跡 汝留遺跡 大崎城跡 蜂屋遺跡 新宮村井遺跡 枝田遺跡 芦井  
 畿田遺跡 中野高柳遺跡 洞ノ口遺跡 仙台城木丸路 吉川橋遺跡 赤井  
 遗跡 柳之御所遺跡 輪上遺跡 石田遺跡 山形城跡 本町一丁目遺跡  
 安江町遺跡 打木東遺跡 勝田ナベタ遺跡 加茂遺跡 吉田C遺跡 美麻  
 泰比古神社前遺跡 麻生谷遺跡 下ノ西遺跡 鹿島遺跡 蔵ノ坪遺跡 船  
 戸桜田遺跡 西川津遺跡 尾道遺跡 國防國府跡 観音寺遺跡 中前川町  
 二丁目遺跡 井相田C遺跡 元岡・桑原遺跡 被居田遺跡 冲跡(1) 冲  
 游跡(2) 上高橋高田遺跡 白幡遺跡群

一九七七年以前出土の木簡(1)(3)

## 平城宮跡(七七八)

## 紙文の訂正と追加(四)

平城京跡左京一条十三坪(12号) 大篠田遺跡(19号) 荒井篠  
 田遺跡(2号) 東木津遺跡(11号) 下ノ西遺跡(11号)

## 七世紀木簡の国語史的意義

## 飛鳥池木簡の再検討

新刊紹介 V・L・ヤーニン著《松木栄三・三浦清義訳》

吉川喜司

「古様の手紙を送りました」ロシア中世都市の歴史と日常生活 渡辺晃宏

書報

価額 五五〇〇円 送料六〇〇円

## 滋賀・宮町遺跡



(水口)

大溝SD二二一一一三(総約  
数の木簡が出土している西

- (1) 「人君牒」  前
- ・ 「充給宣」 月一日

191  
(128)×29×2 019

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 1 所在地           | 滋賀県甲賀市信楽町大字宮町                               |
| 2 調査期間          | 一 一九九八年(平成10年)一月一月<br>二 一九九九年五月一〇〇〇年三月      |
| 3 発掘機関          | 滋賀県甲賀市信楽町教育委員会                              |
| 4 調査担当者         | 鈴木良章・高橋加奈子                                  |
| 5 遺跡の種類         | 宮跡  |
| 6 遺跡の年代         | 八世紀中頃                                       |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 今回報告する二つの調査地点は、いずれも紫香楽宮推定地である。宮町遺跡の西南部にあたる。 |

本誌第二二二号で報告した第一  
二三次調査の北側約30m  
の地点で第五次調査を、  
約100mの地点で第二四  
次調査を行なった。

いずれも断片的なもので、「文書ない」、帳簿状の木簡の削屑と考  
えられる。軽読可能なのはこの二点のみである。

### 二 第五次調査

(1)	<input type="checkbox"/> 并盤事
(2)	<input type="checkbox"/> 八口
(3)	<input type="checkbox"/> 十人
	<input type="checkbox"/>

091  
092

一二三深さ約1・5m)から出土した。木簡が出土した黒褐色系粘質  
土層は三層に分かれているが、年代差がほとんどないと考えられる  
点は従来と同じである。第二四次調査では形状を有するもの八四  
点、削屑一五六九点が出土しているが、なお整理途上であり、今後  
点数の変動があり得る。

(2)  
〔佐伯カ〕  
殿

少将殿

(143)×(30)×4 081

(9)

・「▽近江国坂田郡下坂田郷人身膳米」  
〔井カ〕

155×19×3 033

- (3)  
・「五月八日米四斗七」

00

・「近江国浅井郡湯〔火カ〕」

(69)×12×3 019

- (4)  
〔七日カ〕

147×(40)×5 081

(11)  
〔近江国カ〕〔郷カ〕

(68+55)×21×3 009

- (5)  
・「尾張国海都津積郷」  
〔天平十六年〕

196×22×3 019

(12)  
〔近江国カ〕〔郷カ〕

(146)×20×5 003

- (6)  
・「△参河国□□□□□郷□」  
〔天平〔十一年月カ〕〕

196×22×3 011

(13)  
〔△安八□□□□□〕

(147)×22×3 019

- (7)  
・「△参□□□□□郷」  
〔合米五□〕

(210)×(13)×9 039

(14)  
・「△郡赤美里」  
〔塙カ〕

(115)×27×3 059

- (8)  
・「△近江国爱智郡蚊野〔郷カ〕」

(72)×19×5 019

(15)  
〔△丹波□〕

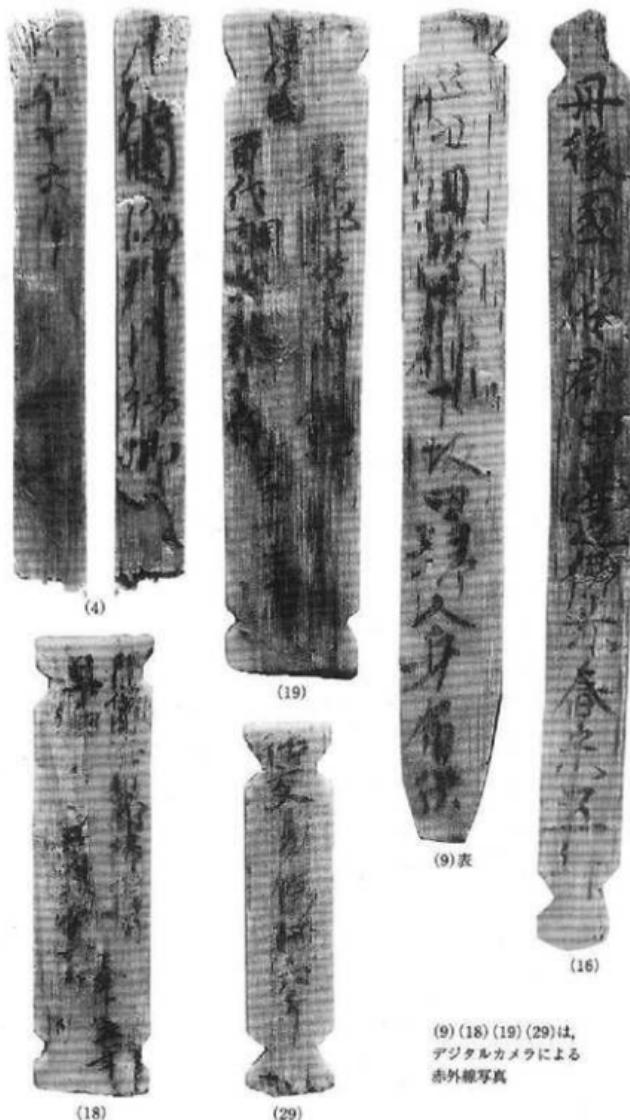
(66)×(21)×7 039

- 09  
・「△丹後国加佐郡田辺郷赤春米五斗△」

(93)×20×2 039

172×16×4 031  
〔△丹□□□□□丹波郷□□□□□□□△〕  
290×41×7 031

18	「 <u>△</u> 隱岐国海部郡御宅郷 日下部 <u>□</u> 海藻六斤」	天平十五年 〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	□万品米五斗	(100)×28×4 059
19	「 <u>△</u> 隱岐国海部郡御宅郷 百代調海藻六斤」	天平十五年 〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	□五斗	(103)×24×5 059
20	「 <u>△</u> 隱岐国役道郡武良郷伊我マ都支波 調鰐六斤」	天平十六年 〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	□□麻呂 <sub>黒人</sub> 卷俵	(100)×22×9 039
21	「 <u>△</u> 讃岐国阿野郡 <u>□</u> 鴨戸主酒マ刀良戸粘麻糬一俵」	天平十六年 〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	□□麻呂 <sub>黒人</sub> 卷俵	(103)×24×5 059
22	「 <u>△</u> 〔美 <sub>ノ</sub> 國 <sub>カ</sub> 〕〔鰐 <sub>カ</sub> 〕」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 御交易鳥賊六斤」	70×16×4 031
23	「 <u>△</u> 」	天平十六年 〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 雜魚煮四百九十一」	191×14×5 033
24	「 <u>△</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> ○中」	32×18×2 055
25	「 <u>△</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> ○衛」	217×23×6 031
26	「 <u>△</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 片佐良十口」	200×24×3 051
27	「 <u>△</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 」	(100)×43×5 081
28	「 <u>△</u> 天平十六年四月 <u>□</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 」	(80)×(10)×4 039
29	「 <u>△</u> 大内郷戸主 <u>□</u> 」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 金万品豆口阿豆女」	(82)×17×4 039
30	「 <u>△</u> 田治比部黒麻戸米五斗」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 一半」	150×(18)×4 051
31	「 <u>△</u> 人鳴矢」	〔 <u>脚カ</u> 〕	<u>△</u>	「 <u>△</u> 」	(63)×24×2 019



(9) (18) (19) (29)は、  
デジタルカメラによる  
赤外線写真

41	〔守た〕 □マ国方呂
40	□マ□万呂
39	□□□□□
38	王生マ麻呂□
37	枚一上□□
36	「」
35	「」
34	初位上
33	129×70)×9 081
32	□□大生マ□
31	丈マ□
30	驅丁給一斗
29	用一使
28	□宜承知 <small>〔諸白カ〕</small> □仰下旨
27	□得麻呂
26	麻呂年廿
25	(61)×(14)×4 160
24	(63)×9×5 059
23	(61)×(14)×4 160
22	(63)×9×5 059
21	〔謹謹謹牒 謹謹謹牒 〔難波宮カ〕
20	□□□□□
19	「」
18	129×70)×11 180
17	129×70)×5 181
16	129×70)×5 180
15	129×70)×5 181
14	129×70)×5 181
13	129×70)×5 181
12	129×70)×5 181
11	129×70)×5 181
10	129×70)×5 181
9	129×70)×5 181
8	129×70)×5 181
7	129×70)×5 181
6	129×70)×5 181
5	129×70)×5 181
4	129×70)×5 181
3	129×70)×5 181
2	129×70)×5 181
1	129×70)×5 181

(1)は三片が接合したもので、「人君」から出された文書形式の木簡。「宣」をベシと読む位置に記すのは、一條大路木簡にも例がある。文書木簡としては、この他に切の削屑がある。

(2)は一片が接続したもので、何名かの名を記す歴名の木簡であるが、用途は不明。「少将」は中衛府・授刀衛・近衛府・外衛府にも置かれているが、時期的に該当するのは中衛少将のみである。「佐伯殿」については、佐伯氏にはこの段階で衛門督佐伯常人、左衛士督佐伯淨麻呂の、知られる限りで二人の衛府官人がいたことが注目される。このうち常人は、天平一七年元旦に紫香楽宮に大幡鉢を建

てた人物である（『続日本紀』）。

(3)は米の管理に関する木簡かと思われるが、具体的な内容は不明。

(4)・(5)は付札木簡。諸國貢進物の付札としては、参河、丹波、尾

張、美濃、丹後、若狭、隱岐、近江、讃岐国の九ヵ国ものがあり、

(6)の讃岐国は宮町遺跡では今回が初例。宮町遺跡出土の調査の付札

が、「続日本紀」天平一五年一〇月壬午（二六日）条に紫香楽宮への

調査貢納国として見える東海・東山・北陸道諸国に限定されないこ

とはすでに明らかであるが、さらに南海道の国が加わった。(5)は尾

張国からの庸米の荷札であるが、○一型式のものはこれまでに八

例が知られるのみであった。(6)は二片が接合。左辺が四分の一程度

欠損している。(8)・(11)は近江国貢進物付札。(10)は接合しない二片

からなるが、形態から同一木簡の断片と判断した。(12)は美濃国安八

郡か。

(13)は上端が折れて(14)名を欠くものの、若狭国調査を貢納した木簡と知られる。調査の木簡は宮町遺跡では初の出土。(15)は丹波国からの木簡で、下半が切削され、左辺も削れているが、右辺に切り込みが残る。(16)は丹後国貢進物付札。(17)は春米の付札。

丹後国は年料春米の貢進国として「延喜式」民部下に見える。赤春米は平城宮木簡にも類似がある。(18)・(19)は隱岐国貢進物付札。(20)は美濃国または美作国貢進物付札。(21)は郡名を記さず、郷名から書き出す。大内郷は伊賀・丹後・伊予にある。

(22)は、年料春米かと推定される米五斗の貢進に關わる付札。(23)も品名は判読できないが同様であろう。(24)の右辺は二次的削り。「戸米」の表記は、これまで平城京長屋王家・二条大路、長岡京本

簡に一四例ある。

(25)は鳥賀の付札。品目と数量のみを記すが、「御交易」とあることからみて、貢進物付札とみられる。なお、「御交易」の文言は、

長屋王家木簡に一例あるのみである。

(26)も品目と数量のみを記す。宮町遺跡からは、これまでに「猪干穴」「上縫」などと記した○五一形式の木簡が出土しており、それとの関連が想定される。

(27)は表裏にそれぞれ「中」「衛」と記す小型の木簡。四つの角を丸く削り、上部中央に穿孔する。同型式で「中衛」と記した木簡は、宮町遺跡ではこれで三例目となる。(28)は、「片佐良」の前の行は墨痕が比較的明瞭であるが、成案がない。(29)は比較的厚みのある材で、表に人名を書き列ね、裏に、左を上にして「上縫」と記す。(30)の生部は壬生部であろう。

今回出土した木簡には、年紀を有するものが多い。内訳を記せば、天平一五年が若狭一点と隱岐二点、天平一六年が尾張・隱岐・讃岐・國名不明の各一点である。宮町遺跡からこれまでに出土した年紀を有する木簡については、天平一三年の一点を除き、全て天平一五年から一七年にかけてのものであり、これは天

平一四年八月から同一七年五月の紫香楽宮存続期間に含まれること  
が既に指摘されている（鈴木良章・柴原水瀬男「紫香楽宮関連遺跡の調  
査—宮町遺跡の発掘調査を中心」）（『奈良制・古代都市研究』一六、二〇  
〇〇年）。今回の事例も、この期間に含まれるものである。

この他、「難波宮」と記されたと思しき削削<sup>41</sup>の存在も注目され  
る。天平一六年一月、聖武天皇は難波宮から紫香楽宮へ行幸するな  
ど（『續日本紀』）、両者の関係が密接であったことはいうまでもない  
が、今後の調査の進展により、両者の関係が出土文字資料の面から  
も明らかになることが期待される。

なお、木簡の釈読は、紫香楽宮跡調査委員会（木簡解説部会）に  
おける検討結果に基づくものである。

（古市　晃（大阪歴史博物館））

文化財写真に携わる人の必携マニュアル

『埋文写真研究』十三号

埋蔵文化財写真技術研究会編

卷頭言 上原真人

特集 「今なぜ銀塙か?」

その後のキトラ古墳

CDDを利用した赤外線写真撮影

「報告書」は再生紙で?

何でこうなるの?失敗写真の舞台裏

在庫状況のお知らせ

頒価 一~四号 品切れ

五~八号 三五〇〇円  
九号 三〇〇〇円  
十~十三号 三五〇〇円

送料 一冊~四冊まで 五〇〇円

五冊~十冊まで 一〇〇〇円  
一一冊以上 無料

ご注文は、当研究会まで直接お申し込みください。  
ご送金は、郵便振替でお願い致します。

宛先 〒六三〇一八五七七 奈良市二条町二丁目九番一号  
奈良文化財研究所気付 埋蔵文化財写真技術研究会  
電話 〇七四二一三〇一六八二八  
郵便振替 口座番号 〇一〇五〇一九一九九三〇  
埋蔵文化財写真技術研究会宛

## 滋賀・柳遺跡

やなぎ



(京都東北部)

柳遺跡は、典型的な天井川である草津川の左岸沖積地に位置する。  
河川改修に伴い、一二三五〇m<sup>2</sup>を調査した。

検出遺構には弥生時代後  
期～終末期の旧河道・方形  
周溝墓、鋸倉時代前期の掘  
立柱建物・井戸・土壙墓、  
鋸倉時代前期から室町時代  
の水田などがある。水田遺  
構は調査地周辺から西方向  
の琵琶湖に向けてひろがる  
栗太郡統一里地割にのる

- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| 所在地            | 滋賀県草津市青地町字水回瀬        |
| 調査期間           | 一〇〇〇年(平12)四月～一〇〇一年二月 |
| 発掘機関           | 財滋賀県文化財保護協会          |
| 調査担当者          | 平井美典                 |
| 遺跡の種類          | 集落跡・水田跡              |
| 遺跡の年代          | 弥生時代～室町時代            |
| 遺跡および木筒出土遺構の概要 |                      |

- |     |                                       |
|-----|---------------------------------------|
| 8   | 木筒の収文・内容                              |
| (1) | ×最上第一希有之法若是經典所】 (186) ×13×0.5 019     |
| (2) | 【分々】<br>□不及一百千万億分】 (168) ×13×0.5 019  |
| (3) | 「須菩提於意云何可以三十二相觀如來不                    |
| (4) | 立柱建物・井戸・土壙墓、                          |
| (5) | ×心如來悉知何】 (181) ×13×0.5 019            |
| (6) | 【提】<br>「□須菩提實無有法可得× (137) ×14×0.5 019 |

もので、一二世紀中頃の開田と考えている。水田面は三面検出され、下一枚の田面上には洪水砂の堆積がみられる。洪水により一時期放棄された後に耕作土および畦畔の復旧がなされている。

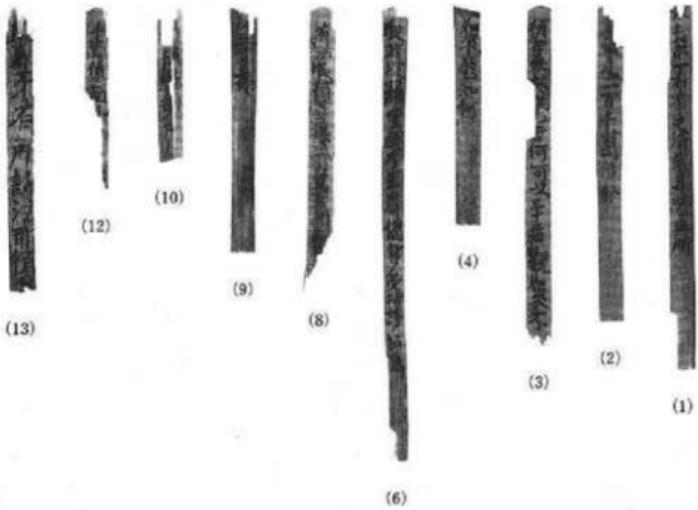
木筒は最下面の水田耕作土を覆う洪水砂の最下部から一四点出土した。洪水砂は厚い部分で一〇cm程を測り、包含されていた信楽甕や土師皿の年代観から一四世紀末頃の堆積と推測される。水田の表面にあった木筒が洪水で埋ったのか、洪水によつて他所から流されできたのかは不明であるが、木筒の出土地点にある程度まとまりがみられることからすると、遠方から流れてきたとは考えにくい。

(7)	「説但凡夫之人貧……」	□ □	(63+132)×12×0.5 011
(8)	「有法眼須菩提於意云何如來×	×	
(9)	「観三菩提」	□須菩提凡夫	(144)×14×0.5 019
(10)	「縁得福」	□	(65)×13×0.5 001
(11)	「千万億劫」	〔以カ〕	(72)×12×0.5 001
(12)	「耶如來有所說法耶須善	」	(108)×13×0.5 019
(13)	「（12）×（10）×0.5	001	(112)×13×0.5 001
(14)	「観三菩提」	」	(136)×13×0.5 019

出土木簡はすべて枯経である。柱目に剥ぎ取った桧の薄板で、頭部を圭頭状にした短冊形につくる。幅約一・三cm厚さ約〇・五mmで、長さは完形の(6)で二四・六cmある。

内容は「金剛般若波羅蜜經」である。経文は片面のみに書写され、書体は同一である。全文が残る(6)は一七文字が配される。

(平井美典)



## 滋賀・八角堂遺跡



(長浜市)

付札状木製品・杓子・曲

所在地 滋賀県長浜市森町字八角堂  
調査期間 一九八三年（昭58）一〇月  
発掘機関 滋賀県文化財保護協会

調査担当者 田中勝弘・中井 均  
遺跡の種類 集落跡  
遺跡の年代 平安時代

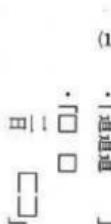
7 遺跡および木簡出土遺構の概要  
八角堂遺跡は長浜平野の北部、鈴川左岸の冲積平野に位置する。遺跡の北東約二〇〇mの小字「観音堂」からは礎石の出土が伝えられ、

地元では礎石の出土地を「じふく寺」と呼ぶ。圓場整備に伴い調査が行なわれた。

木簡は、深さ約五〇mmの沼沢地から出土した。木簡のほかには、須恵器・灰釉陶器・回転台整形土師器、土師器での字皿など土器類、

物・盤・漆器碗・多量の板状製品などの木製品が出土している。時期はいずれも九世紀後半から一〇世紀中頃にかけてのものである。

### 8 木筒の积文・内容



(22)×76×5 081

板材を横に用いており、右側面を欠損する。片面に「道」二字を横に述べ、他面に「日」などを書く。内容および文字の配置から習書とみられる。

### 9 関係文献

滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」XII-1 (一九八四年)

(平井美典)



(参考・付け札状木製品)



(1)



(2)



(3)



(美濃加茂)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
柿田遺跡は、「柿田条里」と称する、近年まで良好に遺存している条里地割内に所在する。ここにインターチェンジ建設が予定され、一九九九年から約八〇〇〇mにおよぶ範囲の調査を継続して実施している。

主な遺構は、弥生時代から古墳時代の集落と隣接する流路、古代の溝や流路と条里の坪塚に造られた道路

- 1 所在地 岐阜県可児市大字柿田ほか  
2 調査期間 一九九九年(平11)五月～一〇〇一年三月  
3 発掘機関 勤岐阜県文化財保護センター  
4 調査担当者 並木幸司・藤岡比呂志・堀 真はか七名  
5 遺跡の種類 集落跡・水田跡  
6 遺跡の年代 繩文時代～近世  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
柿田遺跡は、「柿田条里」と称する、近年まで良好に遺存している条里地割内に所在する。ここにインターチェンジ建設が予定され、一九九九年から約八〇〇〇mにおよぶ範囲の調査を継続して実施している。

- 8 木簡の積文・内容  
木簡の出土した遺構は、東から西に向かって流れる流路である。流路は上下二層に分けられ、上層は主に中世前期、下層は古代に属し、木簡は下層から出土した。流路には護路施設の基礎となる木組みが残存しており、木組みの周辺からは木簡を含め、人形・馬形などの木製祭祀具や大量的の須恵器が出土している。

(1) 九斗十斗 一□ [4枚]  
(100)×28×3.081

上下端とも欠失している。  
木簡の積読にあたっては、文化庁の山下信一郎氏の「教示を得、また愛知県埋蔵文化財センターの」協力をいただいた。  
(近藤大典)

九十九十

## 長野・八幡遺跡群社宮司遺跡



(長野)

遺跡及び木簡出土遺構の概要  
7 遺跡の年代 奈良時代末～平安時代  
8 木簡の発見・内容



(赤外線写真)

社宮司遺跡は千曲川左岸の小支流、佐野川扇状地の扇央部南端、  
「更級郡衙」推定地に近接  
し、郡衙間連道路の可能性  
が高い。一九七五年には更  
城市教育委員会が調査を実  
施している。

八（100）

長野県埋蔵文化財センター「長野県埋蔵文化財センター年報一  
〇」を調査し、平安時代を  
中心に堅穴住居一七棟、掘

- 1 所在地 長野県更埴市八幡字社宮司
- 2 調査期間 二〇〇一年（平13）四月～二月
- 3 発掘機関 長野県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 町田勝則・上田典男・西 香子・谷 和隆・寺内貴美子
- 5 遺跡の種類 集落跡（郡衙推定地の一部）
- 6 遺跡の年代 奈良時代末～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 8 木簡の発見・内容

### （1） 読□城威□

（131）×34×4 081

上下端折損、縦に二つに割れ、下方左側は斜めに削られている。  
つくりの似た漢字を練習した習書木簡と思われる。材質はサワラ。  
9 関係文献

立柱建物三棟、溝八五条、墓一基と多数の土坑を検出した。特記すべき遺物に、ほぼ完形の縄文手付瓶、二彩陶器小壺片、国内初出の六角木幢などがある。墨書き跡も多く、荷札状木製品も一点出土した。

木簡は、東西方向の幅二m深さ一・五mの一号溝より出土。これより北に遺構はほとんど検出されず、区画の溝と考えられる。覆土には礫を多く含み、土器・木製品・植物遺体が多く出土した。一九七五年の調査ではこの溝より小壺蓋形の三彩陶器が出土した。



( 平 ) 荒田目条里制遺構・砂畠遺跡  
（ 平 ） 荒田目条里制遺構は夏井川右岸の広範囲にわたり、砂畠遺跡は沖積地に挟まれた微高地の部分にある。両遺跡の範囲は重複しているが、遺跡の性格が異なり、別の名が付されている。付

## 福島・荒田目条里制遺構・砂畠遺跡

福島県いわき市平荒田目字甲塚・明星町、菅波字砂畠・新屋敷

1 所在地 福島県いわき市平荒田目字甲塚・明星町、菅波字砂畠・新屋敷

2 調査期間 一九八九年（平1）五月～一九九〇年一月

3 発掘機関 聴いわき市教育文化事業団

4 調査担当者 横村友延・吉田生哉ほか

5 遺跡の種類 豪族居宅・集落跡・古墳群・水田跡・近世墓跡

6 遺跡の年代 繩文時代～近世（中心は八世紀～十三世紀）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 遺跡は福島県の太平洋岸、阿武隈山地から太平洋に向かって東流する夏井川の下流域に発達した冲積地に立地する。

荒田目条里制遺構は夏井川右岸の広範囲にわたり、砂畠遺跡は沖積地に挟まれた微高地の部分にある。両遺跡の範囲は重複しているが、遺跡の性格が異なり、別の名が付されている。付

近には、磐城郡衙である根岸遺跡、夏井廃寺、綠釉・灰釉陶器が多く出土した小茶臼遺跡がある。

調査は、国道六号線常磐バイパス工事に伴い、一九八八年から一九九五年まで断続的に行なわれ、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。奈良・平安時代の遺構として豪族居宅を中心とした集落が確認され、集落に伴う水田跡の大溝からは木簡も出土している（本誌第一三号）。なお、郡符木簡が出土した荒田目条里遺跡はこの大溝の上流にあたる（本誌第一七号）。

一二世紀中葉頃～一二世紀には大型の掘立柱建物を中心とした遺構群が存在し、建物周辺では龍泉窯青磁香炉・青白磁権杖などが出土しており、土坑や溝跡からは多層の埴輪とともに羽口や金屬滓が出土している。また、烟の痕跡（瓦状遺構）も広範囲に検出されている。これらの遺構・遺物は平安時代末に新たに台頭してきた勢力に関わるものと考えられる。

木簡(1)～(3)が出土した第一一九号土坑と(4)～(10)が出土した第一一八号土坑は大型の深い掘り込みで、鋳型を製作するために砂を採取した痕跡と考えられる。第一一九号土坑では、(1)と同形態で文字の記されていない木製品も一点出土している。(1)が出土した第三一九号土坑は大型の掘立柱建物に隣接しており、建物の解体に関連する廐棄土坑と考えられる。これらの土坑は、遺構の重複関係や共伴する遺物から一二世紀後半から一二世紀に位置付けられる。

## 第一一九号土坑

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

「三世仏」

## 第一八一号土坑

「始知衆生 本來成仏

「生死涅槃 猶如昨夢」

221×36×2 011

「□古仏 □向主世仏 □

(149)×16×4 019

「□古仏 □向主世仏 □

(87)×13×6 081

「□古仏 □向主世仏 □

(213)×30×1 019

「□古仏 □向主世仏 □

(196)×29×1 019

「□古仏 □向主世仏 □

(156)×19×1 019

「□古仏 □向主世仏 □

(136)×19×1 011

「南無阿彌陀仏」

第三一九号土坑  
「南無阿弥陀仏」

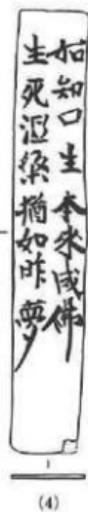
(4)～(9)は短冊形を呈し、四文字×二段×一行の一六文字が記されている。内容は「円覺經」の一部である。(5)も短冊形で、下端が欠損している。やはり経文の一部と考えられるが、文字が不鮮明で、出典は不明である。なお、「向」は「切」の可能性もある。

(7)～(9)は細長い短冊形を呈する。(7)・(8)は、上端がやや丸味を帯びる。下端は欠損しているが、五大種子を示す「釋迦牟尼佛(キヤカラバア)」が記されている。(9)も断片をつなぎ合わせた資料であるが同様の種子であろう。(6)も下端が欠損し、闇夜も不鮮明であるが、赤外線では種子が一行記されているのがかすかに読みとれる。

なお、訳文については元興寺文化財研究所の岡本広義氏のご教示を得た。

いわき市教育委員会「荒田日条里制造構・砂畠遺跡」(いわき市瑞藏文化財調査報告第八四番 一〇〇二年)

(猪狩みち子)



(4)



(11)



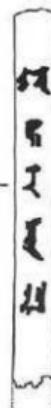
(8)



(9)



(10)



(7)



(6)

6 cm

宮城・中野高柳遺跡

なかのたかやなぎ

- |               |                     |
|---------------|---------------------|
| 所在地           | 宮城県仙台市宮城野区中野字高柳     |
| 調査期間          | 一〇〇一年(平13)四月一~一月    |
| 発掘機関          | 宮城県教育委員会            |
| 調査担当者         | 村田晃一・相原淳一・天野順陽・千葉直樹 |
| 遺跡の種類         | 集落跡                 |
| 遺跡の年代         | 平安時代~戸戸時代           |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                     |



(仙 台)

中野高柳遺跡は仙台平野の北部を流れる七北田川左岸、標高三一四mの自然堤防上に立地する。遺跡は南北に細長く、最も広い部分で南北四〇m東西一五〇mあり、面積は約五〇〇〇m<sup>2</sup>ある。仙台港背後地土地区画整理事業に伴い、一九九四年から宮城県教育委員会と仙台市教育委員会によって発掘調査が行なわれ、遺跡北半部西側では幅三mの溝で開まれた室町時代

代から戦国時代の屋敷跡、南部では鎌倉時代の屋敷跡などが確認されている。また、これらの下層から、平安時代の烟跡・水田跡、河川跡などが検出されている。

一〇〇一年は遺跡北半部西側で約六一〇〇m<sup>2</sup>、南部で約七二〇m<sup>2</sup>を調査した。これまでの調査地を合わせると遺跡全体の三分の一(約一八〇〇〇m<sup>2</sup>)を調査したことになる。

木簡は、北半部の湿地跡から一二世紀前半の土器(かわらけ)とともに出土した。なお、南部の湿地跡からは一三世紀の遺物とともに漆文書が一点出土している。

湿地跡は平安時代の河川跡の上に形成されている。河川跡は遺跡北半部の中央から南部の東縁を南に流れ、南端付近で西に向きを変えている。河川跡を含めた川幅は三〇mを超えるとみられる。北半部と南部の一部で調査を行なったところ、堆積土は黒色粘土を主体とし植物遺体を多く含む上層、砂質シルトを主体とする中層、砂を主体とする下層に大別できた。北半部の上層から一二世紀、南部の上層からは一三世紀の土器・陶磁器がまとまって出土したことから、河川は遙くとも一二世紀初頭までは埋没し、その後湿地化したと考えられる。湿地はゴミ捨て場となっており、焼土や灰・炭化物などとともに、土器・陶磁器・漆製品・木製品・動物遺体・植物遺体が多く出土している。

北半部の湿地跡から一二世紀、南部の湿地跡から一三世紀を中心

とする遺物がまとまって出土したことは、宮城県内において発掘調査例の少ないこの時期の生活を復元する上で貴重な発見になった。特に北半部の湿地跡から出土した一二世紀の土器・陶磁器は、かわらけ（ロクロ+手づくね）、常滑・瀬美窯陶器、白磁であり、この組合せは同時期の東北における政治的・宗教的・経済的中心地であった平泉において特徴的にみられる。こうした土器・陶磁器類の「平安型セット」は、東北地方の中でも限られた遺跡にのみ認められる。遺物を含むゴミの廃棄行為は、湿地の東側から行なわれている。したがって、遺跡北半部の湿地東側には一二世紀に奥州藤原氏と密接な関係にあった人々の居住施設が存在したと考えられる。

## 8 木簡の系文・内容

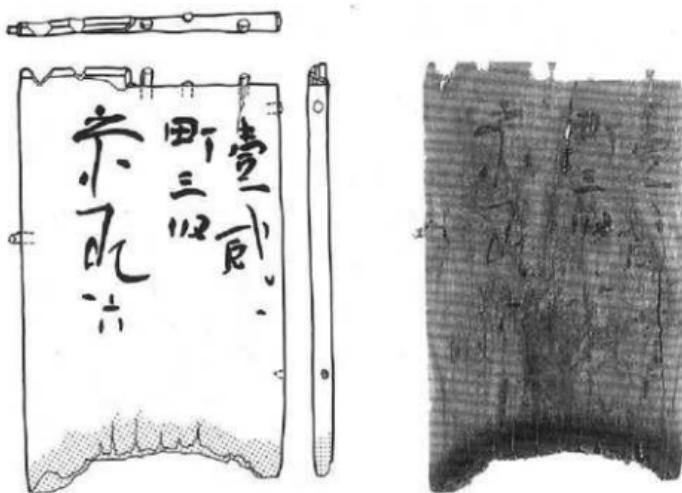
### (1) 「壱式□

町三段  
〔未承々〕  
□□□

(132)×95×7 008

上端に面取りがあり、上端と両側面には木釘が打たれていることから何らかの部材の断片とみられる。下端は焼損している。面積を示す内容が書かれており、土地に関する文書と考えられる。

(1-7 村田亮一、8 吉野 駿)



# 木簡研究 第二二号

卷頭言 最近の木簡を取り巻く状況に思う

田辺健夫

- 一九九九年出土の木簡  
平城京跡 西陵寺跡 阿東陀淨寺院跡 平城京跡左京一条三  
坊十三坪 旧大乗院施園 奈良町遺跡 上宮遺跡 長岡京跡 平安  
京移築跡 六波羅改行跡 平安京跡右京五条一坊六町 雜波宮跡  
大坂城跡 池島・福乃寺遺跡 吉井遺跡 時友遺跡 石城武家屋  
敷跡 鹿路駄馬廻第四地点遺跡 龍野城跡 市辺遺跡 宮内堀跡  
水守遺跡 元鳥遺跡 沢布ヶ森遺跡 雲出鳥賀遺跡 山の神遺跡 中村遺  
跡群 港区南91遺跡 水戸蓬德川家小石川屋敷跡 香川下寺尾遺  
芝崎町遺跡 入谷遺跡 宮町遺跡 大村車道跡 安土城跡 十里道  
前六供遺跡 荒井宿田遺跡 江平遺跡 大日南遺跡 川橋遺  
跡(2) 山王遺跡 新田遺跡 植之御所遺跡 志羅山遺跡(1) 志羅山遺  
跡(2) 山田遺跡 十三塚遺跡 高坂遺跡 三谷谷倉氏遺跡 横井  
城跡(1) 福井城跡(2) 横法寺遺跡 飯田寺 齊中遺跡 堅田B遺跡  
高岡町遺跡 須田藤の木遺跡 東木津遺跡 手洗野赤浦遺跡 八塚  
C遺跡 道場I遺跡 竹池神社遺跡 黄輪遺跡 馬神遺跡 大武II遺跡  
遺跡 馬見坂遺跡 発久遺跡 妻ノ神遺跡 野中土手付遺跡 大坪遺跡  
桜田遺跡 中倉遺跡 大御庵寺 大坪遺跡 喜時雨遺跡 岡山城  
二の丸跡 府山遺跡 土居遺跡 郡山城跡 萩城跡 周防國府跡  
東柳寺 黒山遺跡 教地遺跡 他島城下町跡 元岡遺跡群 今山遺  
跡 永安寺墓寺 飯塚遺跡 中原遺跡 錦刈直根原遺跡

載文の訂正と追加 (三)

- 號持木簡跡 (三三・一四・一七・二〇号) 湯ノ部遺跡 (一九  
号) 屋代遺跡群 (二八号) 前橋城遺跡 (一九号) 矢玉遺跡  
タ遷跡 (二一号) 洲崎遺跡 (二一号) 福井城跡 (二〇号) 磯部カン  
帳清と木簡 (正合院文書の紹介・緒文と木簡)  
木簡撮影概説 (表現しにくい文字の撮影)

書評 鬼頭清明著「古代木簡と都城の研究」

森公章著「長屋王家木簡の基礎的研究」

価格 五五〇〇円 送料六〇〇円

発行

杉本和樹  
北村優季  
平石充



(六) 郡

十二社B遺跡は、秋田県内陸南東部の横手盆地東端に位置し、雄物川の支流である尉川左岸の冲積地上に立地する。標高は約五二m。南に隣接する独立丘陵（北西新田）には十二社A塗跡があり、未発掘ながら須恵器塗跡一基が確認されている。さらに本遺跡の東約二kmには後三年合戰（一〇八三～八七）の主戦場とされる金沢橋跡が存在する。

調査は、開場整備事業に

## 秋田・十二社B遺跡

所在地

秋田県横手市金沢中野字十二社

調査期間

一九九八年（平10）五月一～一〇月

発掘機関

秋田県埋蔵文化財センター

調査担当者

小林芳行

遺跡の種類

土器生産遺跡

遺跡の年代

九世紀中～後期

遺跡及び木簡出土遺構の概要

8 木簡の収文・内容

(1) 「。□□山□□一斗五升」

225×19×8 011

(2) 「大」

131×38×6 011

(1)は上端部に穿孔あり、表面は削りのち墨書き、裏面は未加工である。(2)は材の上部に小さく一文字だけ墨書きしている。

木簡の収文にあたり、平川南氏にご教示をいただいた。

9 関係文献

秋田県教育委員会「十二社B遺跡」(2000年)

(高橋 学〈秋田県立田畠跡調査事務所〉)

(1)



伴うもので、調査面積は七五八〇m<sup>2</sup>。調査の結果、古代の土師器焼成遺構一基、掘立柱建物一棟、堅穴状遺構、土坑、溝跡、柱列などを検出した。土坑のうちの一基の、ロクロ輪軸受とみられるピットは、隣接する土師器焼成遺構・建物・柱列と併存したと考えられ、建物は土師器あるいは十二社Aの須恵器窯に関連する工房跡と推定される。また出土遺物には、土師器・須恵器・木製品がある。

木簡は二点とも遺物包含層出土であり、共伴する文字資料には、「小」や「寺」と墨書きされた須恵器杯、「真公」と焼書された須恵器蓋などがある。

# 秋田・本荘城跡

ほんじょうじょう



(本 荘)

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 1 所在地           | 秋田県本荘市出戸町字尾崎  |
| 2 調査期間          | 第三次調査 一〇〇一年(平13) 一〇月—一二月  |
| 3 発掘機関          | 本荘市教育委員会  |
| 4 調査担当者         | 長谷川潤一・土田房貴  |
| 5 遺跡の種類         | 城館跡   |
| 6 遺跡の年代         | 近世  |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 本荘城は、最上義光の由利郡押領後の慶長二七年(一六二二)頃、由利地方の拠点として橋岡満茂が築城、その後六郷氏の居城として廃藩まで機能した。本調査は、本荘公園整備事業屋内ビル建設に伴い、一八世纪初頭以降の複数の層で多数の瓦窯遺構(土坑)や水溜状遺構などが検出された。史 |

料などから付近に奥御殿があったとされていて、日常生活に伴う廐造構の存在からその台所が付近にあったと推定した。

木簡は現在整理中であるが、現段階で三九点が確認されている。付札状のもの他に、絵または記号らしき墨痕のある板材など多岐に及ぶ。一点は水路を伴い側板によって囲われた水溜状遺構から、それ以外は丸長方形や不定形の廐造構から肥前系陶磁（碗・皿・擂鉢など）、土器（皿・風炉・焼垣甕など）・木製品（箸・柄杓など）などとともに出土している。

## 8 木簡の概文・内容

### 水溜状遺構SK三四〇

(1) 「○六郷伊賀守荷物庄司善九郎預」

「○辰二月十五日」

301×63×15 011

### 廐造構SK三一〇

(2) 「○御膳所御用」

### 廐造構SK三一

(3) 「○飯田□左衛門様 □惣」  
〔会カ〕

「○飯田□〔会カ〕」

138×30×5 011

### 廐造構SK三一五

(4) 「□六郷兵部殿 村岡権右衛門」  
江戸浅草屋 玉米理左衛門 222×58×4 011

### 廐造構SK三三五

(5) 「今晚何之〔儀候カ〕」  
「今晚何〔分カ〕」

「今晚何〔今□□□□□□□〕」

420×96×1 011

### 廐造構SK三三四

(6) 「一春慶〔角カ〕組三十枚之内」  
「切日光膳〔十人カ〕」



198×42×9 019

### 廐造構SK三六四

(7) 「高橋此右衛門様 和泉屋  
斎藤貞七様 作兵衛」

「本□□拾九与利」  
□印

166×54×8 011

(8) 「小□□□□也」 卯□月廿□□

「□□□□□□□□□□□□」  
〔顎カ〕

(26)×18×4= 605

(5)は長大ながらく薄い材を用いている。表面の最後二文字及び裏面の最後二文字は書き手の略号であろうか。一八世紀半ば頃と考えられる。

(1)は水溜状遺構 SX三四〇底面から出土した。庄司善九郎は、

「本荘藩分限帳」で高二〇俵の藩士、親子二名が確認され、六郷伊賀守は藩主六郷政長、「辰二月」は延享五年（一七四八）と推定される。ただし、SX三四〇覆土には一七世紀代の磁器が含まれ、検出面からも一八世紀中葉までは下らないと見られるのでさらなる検討が必要である。

(2)は食器・調理具類などが最も多く出土した遺構から出土したもので、物品の所属を記した札と考えられる。検出層位・共伴遺物により一八世紀半ば頃と考えられる。

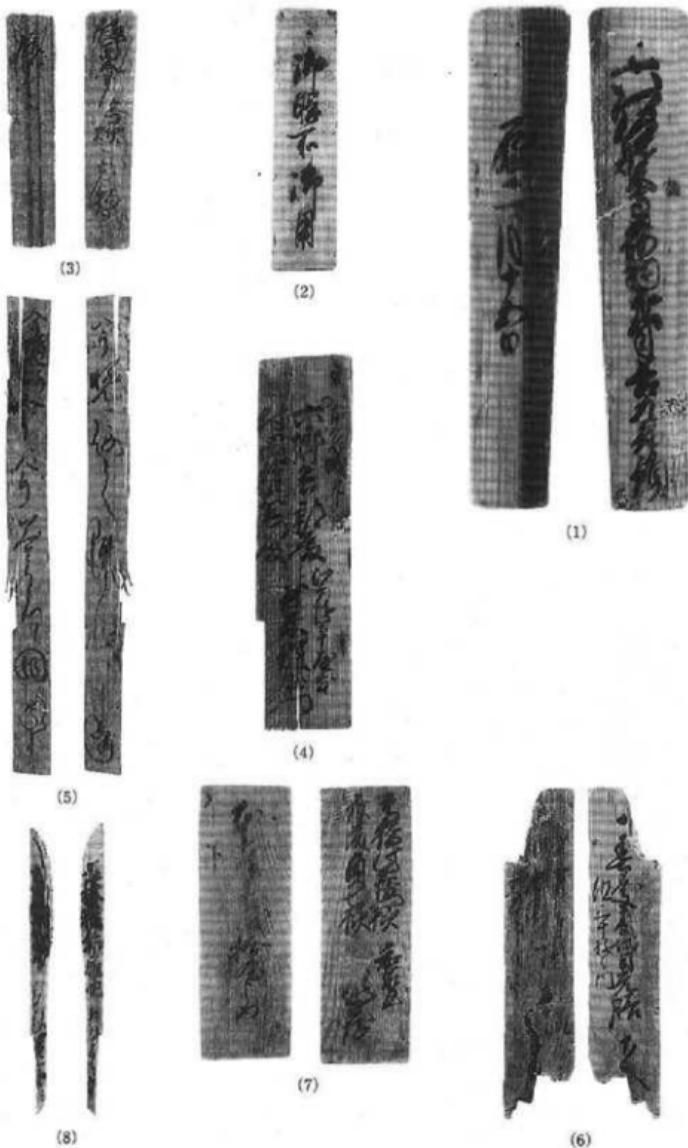
(7)は商人から藩士二名に宛てたもので、資藤貞七は「本荘藩分限帳」で世襲された複数名が確認される。裏面に用件が記されていると推定される。検出層位により一八世紀前半以前と考えられる。

(8)は下端が欠損しているが、刀形を呈していて、本調査では唯一のものである。画面とも刃と鎬が表現され、さらに刃先には切り込みによる刃彫れ状の表現がある。表面には人名らしき記載がみられるが、裏面上部は塗りつぶされている。検出層位から一八世紀前半以前と推定される。

検出面にあたっては、本荘市史編さん室の今野喜次氏のご教示を得た。

(4)は江戸屋敷から國許に宛てたものである。人名は「本荘藩分限帳」でそれぞれ世襲された複数名が確認され、いずれも上級藩士であり、在府・国許間ににおける要人同士のやりとりを示しているが、具体的な内容の記載は無い。検出層位及び人名から一八世紀前半頃のものと推定される。

（長谷川潤一）



## 秋田・北遺跡



(五城目)

- 所在地 秋田県南秋田郡五城目町野田字北  
調査期間 一九九九年(平11)五月~八月  
発掘機関 秋田県埋蔵文化財センター  
調査担当者 杉浦 豊・三崎隆儀・河田弘幸・加藤 竜  
遺跡の種類 集落跡・散布地  
遺跡の年代 繩文時代・弥生時代・平安時代・中世・近世  
遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、八郎潟南東部に注ぐ馬場目川右岸の沖積平野内に位置する。馬場目川は、過去に現流路から北を野田方面に流れていたと推定され、遺跡はこの段階で

形成された標高四~五mの自然堤防上に立地する。

発掘調査は日本海沿岸東北自動車道建設に伴うもので、調査面積は二四五〇m<sup>2</sup>。

調査の結果、繩文時代・弥生時代・平安時代・中世、

近世の複合遺跡であること

が判明した。木簡が帰属する中世の遺構としては、井戸一五基、溝二条、便所三基のほか、土坑・柱穴などが多数検出された。この中世の集落は、出土した青磁・白磁・珠洲焼などの輸入・国産陶磁器から、一三・一四世紀を中心に行なわれたものと考えられる。

木簡は調査区北部で検出した井戸SE〇九から一点出土した。この井戸は長径一六二cm短径一三七cmの梢円形平面を呈し、深さは約一八一cmである。四本の隅柱の間に横棟をわたりした外側に、縦板を立て並べた木組みの井戸枠をもつ。木簡は井戸枠内部から出土した。他に折敷・箸・曲物側板・蓋などとの木製品に加え、割れ口に漆雜ぎの施された珠洲焼の捕鉢一点が出土している。

### 8 木簡の状況・内容

#### (1) 「符籙」急々如律令

(96)×23×2 016

上端は平坦に加工し下端は尖指する。薄いスギ材の片面に墨書きした呪符木簡である。木簡の帰属する時期は、伴出した珠洲焼捕鉢から、おおよそ一二三世紀が上限と考える。なお、木簡の状況にあたって、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。(加藤 竜)



「大宰府政庁跡」の刊行

大宰府は、「大君の遠の朝廷」と諱われる、古代律令制下の外交と交易、西海道諸国支配の重要な拠点である。その中枢部で、菅原道真が「都府樓」と詠んだ政府の発掘調査報告書が刊行された。

大宰府の発掘調査は一九六八年より永年にわたり、その成果は膨大である。本書は、そうした発掘成果と、最新の成果をあわせて集成したものである。

遺構や出土遺物の豊富な写真を駆使している。また木簡の再談も行っている。A4判・上製・函入・外箱付・七二二頁(原色口絵八頁・折込九丁・付図二丁)。

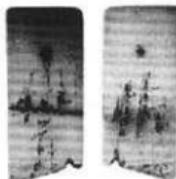
なお、発売は吉川弘文館から。価値は二八〇〇円(税別)。

## 青森・高間（六）遺跡

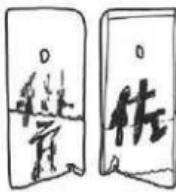


(青森西部)

6 遺跡の年代 平安時代・近世・近代  
 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
 本遺跡は、青森市西部を東流する新城川の右岸標高五m前後の冲積地及び微高地上に立地する。本調査は、東北新幹線新青森駅（予定）周辺の土地区画整理事業に伴うもので、一六カ所のトレーンチを設定し実施した。検出遺構は、土坑・溝・ピットで、土坑の埋土中に平安時代に降下した白頭山・苦小牧火山灰の堆積が認められ、陶磁器・砥石が遺構外から出土している。



(赤外線写真)



(木村淳一)

- 1 所在地 青森市大字石江字高間
- 2 調査期間 二〇〇一年（平13）一〇月—一一月
- 3 発掘機関 青森市教育委員会
- 4 調査担当者 木村淳一
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代・近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 8 木簡の积文・内容

(1)

「。佐

(45)×19×4 019

上端は方頭、中央に穿孔が見られる。下部は欠損する。また、表面の上端及び左上端部は面取りされている。

なお、积文にあたっては弘前大学の鍾江安次氏のご教示を得た。

9 関係文献  
 青森市教育委員会「市内遺跡発掘調査報告書」（1991年）

## 木簡研究 第二号

石上英一

卷頭言 WEB 版木簡データベースの公開に思う  
一九九八年出土の木簡

秋篠・山陵道路 東御寺由境

内藤原京跡右京右京七条一坊十五坪

大藤原京跡左京北五条三坊南西坪

飛鳥池道跡 飛鳥東方道路

飛鳥東垣内道路 川原寺跡

吉

備池庵寺

長岡宮跡

平安京跡左京三条三坊十五坪

平安京跡左京

七条二坊八町及び本國寺

鳥羽道跡・鳥羽難波宮跡

大般道路

興戸

宮ノ前道路

武者ヶ谷道路

河守道路

難波宮跡

大坂城下町跡

長保寺遺跡

溝岸道路

玉横道路

鈴井道路

加都道路

豊岡城館

道路

岩井枯木道路

宮内黒田道路

姫路駅周辺第四地点

道路

網干道路

六条A道路

佛田地区内

道路群奥ノ屋内地區

内垣外道路

道路

宇津宮辻子幕府跡

沙留道路

江戸城外

鬼跡

御堀端通

町屋跡

法光寺跡

白雨道路

池之端七軒町道跡

尾

上浜道路

屋代道跡群

（北陸町道跡）

新幹線関係

復田道跡

一本柳道路

後田（旧月記）

道路

洲洲

市川橋道路

柳井地跡

（1）

福井城跡

（2）

神野道路

中保B道路

東木津道路

板谷南道路

板井A道路

下ノ西道路

下町

坊城道路

C地点

船戸川

崎

造跡

三田谷I

造跡

熊田散布地

岡山城

（丸）

中国電力

安

電所

道路

（滑輝小）

造跡

米田道路

百間川米田道路

長登銅山路

觀音寺道路

平田七反地道路

跡

元岡重路群

平城京跡左京二条坊十坪

長岡京跡（一八号） 東浅香山道路（一〇号） 伊興道路（一九

号）

シナボジウム「長屋王家木簡をめぐって」の記録

削削からみた長屋王家木簡：渡辺栄宏、長屋王家の米支給関係木簡

：勝浦令子、長屋王家の経済基盤と荷札木簡：鶴木謙周、討論のま

とめ：東野治之

木簡の摄影

象評  
今泉隆雄著「古代木簡の研究」

頃仙 五百〇〇円 送料六〇〇円

森 公章夫  
井上直夫

徳島県埋蔵文化財センター編

『觀音寺遺跡 I（觀音寺遺跡木簡篇）』の刊行

七世紀代の地方支配などを示す木簡群として著名な徳島県觀音寺遺跡出土木簡の報告書が、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第四〇集『觀音寺遺跡 I（木簡篇）』－一般国道一九二号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査－として刊行された。

木簡一点ごとにモノクロ写真・赤外線写真・実測図・紙文と解説を付す。一部木簡はカラー図版も所収する。実測図には削り痕跡などを詳細に記載し、モノとしての木簡がもつ情報を提供している。

また、木簡の理解に不可欠な遺構や共伴遺物についての解説も、コンパクトにまとめられている。木簡出土状況の写真もカラーモノクロとも豊富である。

A4版・一二二頁・カラー図版八頁・モノクロ図版一四頁・付図一枚。

木簡学会役員(2001・02年度)

幹事監事	会長副会長
吉江 増潤 鈴木 崇微	佐藤 宗諒
市石上 渡辺 敏史	鎌田 元一
大樹英一	今泉 隆雄
西村さとみ	清水 みき
景二	土橋 誠
岩宮東野	本郷 真紹
吉川	山中 敏史
馬場竹内	渡辺晃宏
山本	吉川
聰崇基亮	鶴見 鶴森 浩幸
横内裕人	古尾谷知浩 泰寿
	和田翠
	吉川 明
	鶴山 真平
	西山 真平
	笛野 和巳
	笛野 正二
	岩本 征夫
	田辺
	佐藤 信
	寺崎 保広
	平川 南
	山下信二郎

## 木簡研究第二〇号

卷頭言—機器の日・人の目—

和田 草

一九九七年出土の木簡

和田 草

概要 平城宮跡 平城京跡(1) 平城京跡(2) 青野遺跡 藤原宮跡 酒船石遺跡 長岡宮跡 長岡京跡左京二条四坊三町 長岡京跡右京六条二坊六町 平安京跡右京三条坊三町 平等院庭園 細工谷遺跡 大坂城跡 天満本願寺跡 堺堺津都市遺跡 東浅香山遺跡 猪名庄遺跡 屋敷町遺跡 加賀道跡 明石城 武家屋敷跡 墓谷遺跡 茂利宮の西遺跡 安坂・城の堀遺跡 大若草遺跡 大藏城跡 沼名川遺跡 明治大学記念館前遺跡 千駄ヶ谷五丁目遺跡 山崎上ノ南遺跡B地点 西原遺跡 松本城三の丸跡 小堀町 松本城下町跡伊勢町 三輪田遺跡 一本橋遺跡 志羅山遺跡 三条遺跡 山田遺跡 扎田橋跡 大光寺跡城跡 遊井城跡 金石木町遺跡 戸水大西遺跡 壱田B遺跡 七尾城下町遺跡 鈴喰A遺跡 二口五反田遺跡 清水堂F遺跡 下ノ西遺跡 中倉遺跡 大御堂尾寺 三田谷I遺跡 有福寺遺跡 高田遺跡 百瀬川米田遺跡 非寺遺跡 末原窯跡群(灰原上層) 森城跡(外堀地区) 高松城跡 親音寺遺跡 上長原A遺跡 香椎B遺跡 博多遺跡群 魚屋町遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二〇) 藤原宮跡

信濃の古代と屋代遺跡群：寺内隆夫、七世紀の屋代木簡：海田史、七世紀の地方木簡：鷹江安之、七世紀の宮都木簡：鶴見泰寿、律令制の成立と木簡：七世紀の木簡をめぐって：館野和巳

書評 佐藤信吾「日本古代の宮都と木簡」

長野特別研究集会の記録

积文の訂正と追加(一) 山垣遺跡 桃林遺跡(深田地区) 桃林遺跡

入佐川遺跡 出雲国序跡

再び長屋王家木簡と皇義家令について

八木 充

新刊紹介 大庭脩編著「木簡—古代からのメッセージー」 丸山裕美子 著  
頃備 五五〇〇円 透科六〇〇円

直木孝次郎・鈴木重治編

「世界遺産 平城宮跡を考える」

（考古学・歴史学・地質学・環境論・交通論から）

二〇〇一年一月に、本簡学会を含め計一九の学会・団体が実行委員会を組織して開催した「高速道路計画で危機を迎えた世界遺産平城宮跡を考える」シンポジウムの記録が刊行された。内容は以下の通り。

平城宮地下高速道路問題について考える（開会にあたって）（甘粕健）、古代史研究と平城木簡（佐藤宗輝）、聖武天皇と四都（小笠原好彦）、平城宮跡とユネスコ・世界遺産条約（野口英雄）、世界遺産古都奈良の文化財を大気汚染からまもる（西山要一）、奈良市内のド真ん中に超高速道路が必要か（小井修一）、平城宮と木簡（寺崎保店）、パネルディスカッション「世界遺産・平城宮跡の保全と活用をめぐって」（実行委員会の構成団体の一つでもある平城京を守る会が二〇〇一年一〇月に行なった「守ろう世界遺産・平城宮跡の集い」の記録、及び今回の平城宮跡保存に向けての活動の記録（各学年・団体の要望書・声明など、及び年表）を併載している。

四六頁並製三六八頁 カラー図版四頁 図表・写真一〇五点  
本体価格一、五〇〇円＋税

（株）ケイ・アイ・メディア刊

〒三四四一〇〇六七 埼玉県春日部市中央四一九一三八

電話〇四八一七六〇一八〇八 FAX〇四八一七六〇一八〇九

## 一九七七年以前出土の木簡（二四）

### 奈良・平城宮跡

所在地 奈良市佐紀町

2 調査期間 第九一次調査 一九七四年（昭49）七月～一〇月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 鈴木嘉吉

5 遺跡の種類 都城跡

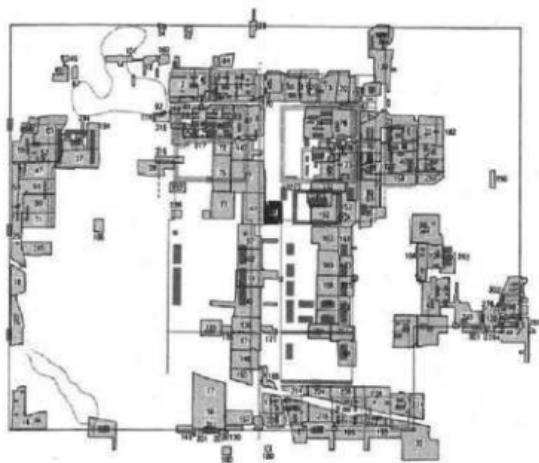
6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は北から第一次大極殿地域と内裏地域に張り出す二つの丘陵の谷間で、内裏外郭西南隅にある。調査面積は一八九七畝。

検出した主な遺構と変遷は次の通りである。

A期は谷間の低湿地に、五〇畝程度の第一次整地を施す。そのうえで、内裏外郭を囲む掘立柱塀SA八一六五を設け、その南に五棟の小規模な掘立柱建物群を造営する。B期にはA期のSA八一六五以北の内裏外郭内部に第二次整地を施し、高さ約一mの土壌を築く。



平城宮跡内調査位置図

この土壇の縁に沿つて車底SC八一六八を設け、内裏外郭を区画する。C期にはB期のSC八一六八とは同位置で築地塀SA八一七〇に造りかえ、南面に門SB八一六〇を開く。また内裏外郭内部に、

七間×四間の矮柱礎石建物SB八一五〇を建設する。

木簡はいずれも、旧地表とA期（第一次）整地層の間から、建築用材の破片・削屑や檜皮とともに出土しており、平城宮造営の過程で廃棄されたものである。木簡は調査区の西南部からまとまって出土しており、総点数は三三三四点（削屑一五九点）である。

## 8 木簡の积文・内容

- |     |  |   |  |  |
|-----|--|---|--|--|
| (1) | □ □ □ □ □ □ □  | 〔和銅〕  | 鳥取マ大山<br>〔日奉 古タ〕   | 091  |
| (2) | ×髮マ一升 一 □  | 〔(47)×29×5 039〕   | □□マ□   | 091  |
| (3) | ×一升  | 〔(46)×(20)×1 081〕   | 伎部万  |  |
| (4) | ・「車持若麻呂」<br>・「車持若麻呂（右側面）」<br>・「額田部御」<br>・「額田部」<br>・「車」<br>車□ [麻呂カ] | 〔(117)×25×20 065〕<br>〔(13)×(20)×2 081〕<br>〔(71)×20×2 039〕<br>154×(30)×2 061 | ・廿二廿四廿五廿六廿七廿八<br>・「△△嶋上郡白髮マ里」<br>・「尾治国海郡嶋里人」<br>・「海連赤麻呂米六斗」<br>・「三川国飽海郡大鹿マ里人」<br>・「大鹿マ塙御調塙三斗」<br>・「△近江国□」<br>・「△△□□□□」 | (9) (8) (7) (6) (5)<br>〔(103)×27×2 081〕<br>〔(159)×32×4 032〕<br>〔(184)×22×3 051〕<br>175×30×3 011<br>〔(71)×20×2 039〕 |

04	・「越前国香々郡綾マ里綾〔マリ〕」	「▽海都郡前里 阿義マ都称軍布廿斤」	191×24×5 031
05	・「□田伊支見白米五斗」	167×21×6 051	
06	・「▽丹波国水上郡石□里笠取直子万呂一俵納」	〔銀＊〕	
07	・「▽白米五斗 和銅□年四月廿三日」	139×20×3 011*	
08	・「▽丹波〔國＊〕 負里□□マ□牟一俵」	199×21×6 033	
09	・「▽納白米五斗 和銅三年四月廿三日」	224×18×4 033*	
10	・「▽丹波国水上 石負里水△X		
11	・「▽伊納白米五斗 和銅三年△X	(132)×19×4 039	
12	・「▽丹波國カ水上△X		
13	・「▽伊納白米五斗 和銅三年△X	(80)×21×3 039	
14	・「▽白米五斗		
15	・「▽漆マ色人庸米△X	(96)×22×3 039	
16	・「▽賀陽郡草」		
17	・「▽首麻呂俵」	(64)×21×3 059	
18	・「▽讃岐国香川郡原里秦公□身」	182×19×3 061	
19	・「▽丹波国□□郡川□□□	153×20×3 011	

48	「 <u>伊予国桑村郡林里</u> 鴨馬首加都土 中儀 <sup>ウ</sup>	V	148×18×4 032
49	「 <u>物部 物部</u>	V	202×25×3 031
50	「 <u>野里人古万呂</u> 」	131×19×4 033	49は淡々河推推程霜
51	「 <u>野里人佐伯マ</u> 」		推海梅推海物物物讓讓
52	「 <u>称方呂儀</u> 」		(141)×52×3 081
53	「 <u>称方呂儀</u> 」		50は淡々河推推程霜
54	「 <u>称方呂儀</u> 」		51は淡々河推推程霜
55	「 <u>不知山里儀五斗八升</u> 」		52は淡々河推推程霜
56	「 <u>大前里六斗</u> 」		53は淡々河推推程霜
57	「 <u>私里丹生波田六斗持</u> 」		54は淡々河推推程霜
58	「 <u>石原里五斗</u> 」		55は淡々河推推程霜
59	「 <u>石原里五斗</u> 」		56は淡々河推推程霜

(119)×27×3 059  
 296×27×4 051\*

积文は既に既公表のものによつたが、今回赤外線テレビカメラ装  
置によって再訳読した成果を取り込んで改めた部分がある。  
第九一次調査出土の木簡の特徴としては、概ね次の四点が指摘で  
ある。

第一に、平城宮造営に伴つて廢棄された、平城遷都前後の活性  
の高い遺物である点である。木簡の年代についてみると、紀年銘を  
もつ木簡は和銅二年（七〇九）（1）と三年（665）に限定される。  
（19）も残画からみて和銅二年または三年のいずれかであろう。また和  
銅六年五月の一二字墓名表記への改訂（『続日本紀』同月甲子条、『延喜  
式』民部省式上）以前のものが多數含まれている。「和名抄」に即し  
ていえば、10は須津國島上郡真上攝、11は尾張國海都郡志摩攝、12  
は參河國渥美郡大聖寺、13は播磨國明石郡葛江鄉（「明」は「延喜  
式」の誤記）、14は讃岐國阿野郡氏部郷、15は「いさやま」と読み、備  
後國沼隈郡諱山郷か（東野治之「『万葉集』と木簡」（長屋王家木簡の研  
究）塙書院、一九九六年）による。16は「德郡」は三河國宝飯郡の古い  
表記である。17の「針間」も古体をとどめる。和銅六年四月には、  
丹後・美作・大隅国の分国がなされるが（『続日本紀』同月乙未条）、  
09-24のように分国以前の木簡も認められる。（19は後の丹後國加佐郡、

川守郷、(2)は美作国勝田郷にある。

以上の点や、書風も平城宮で一般的にみられるものよりは古いと判断されること、荷札木簡の貢送者名の記載が平城宮木簡で一般的な戸主・戸口名ではなく「某里人+人名」となっている点、その一方で評制に関わるもののが存在しない点などを考え合わせると、これらの木簡は、いずれも和銅二・三年を中心とする八世紀初頭の一括性の高い遺物と考えられる。

第二に、荷札木簡が多くを占め、その大部分が米の荷札である点である。まず、庸米荷札としては明記のある(2)の他、「六斗」「五斗八升」と書かれた四点(12)(13)(14)(15)も該当しよう。白米荷札にはそれと明記するものが五点ある(16)(17)。「俵」とだけある六点(20)(21)(22)(23)(24)(25)や単に「五斗」とある(26)も、庸米・白米の区別はできないが米の荷札であり、また木簡の先端部を失せた(27)(28)も米の荷札であろう。これらの米や、(29)の塩、(30)の軍布は平城宮造営に從事した仕丁・役丁や、その監督にあつた官人たちによって消費されたと考えられる。

第三に、特定地域からの品目を同じくする荷札が集中して出土している点である。まず(31)(32)は、丹波国氷上郡石負里からの白米荷札である。三点の木簡は形状・表記の仕方がよく似ており、この点では(33)も同様である。一片分離の(34)は接合部が荒れており、(35)は表面中央部の腐蝕が激しく、(36)は木簡の下端が折れている(37)はさ

らに「忍」字の場所が表面削離している)など、個別的には問題があるが、これらを相互に見比べることで、それぞれ欠けた文字の推測が可能である。「一俵納白米五斗」という表記は珍しく、俵に白米五斗が納められた状態を示しているのであろう。類例として、「丹後國熊野郡私都郷高屋□大賛」「納一斗五升」(平城宮発掘調査出土木簡概報)六、八頁)をあげておく。(29)(30)は備中國賀夜郡の荷札であり、(26)は足守(葦守)郷のもの。また、(30)(31)も同一里の荷札である。(26)は下端折れで墨痕が薄く残るのみであるが、裏面の「祢万呂俵」は(31)と共通で、文字の大きさ・書体も極めて類似している。(31)の氏姓は不明であるが、(31)(32)は同一里、同一人物の荷札の可能性が高いといえよう。つまり、ひとつ目の荷に複数の荷札が付けられていた事例にあたるのである。木簡の形状は、(31)が上端に切り込みをもつて対し、(32)はそうなつておらず、機能の違いを示しているのかかもしれない。なお「三野里」は複数の候補があり、特定はできない。

第四に、人名を記したと思われる削層が未報告のものも含めて比較的多數みいだせる点である。木簡のなかには、(5)のような歴名木簡があるので、これらの削層は歴名様の帳簿の類を削ってできたものと推測される。(2)の「斐マ」を「白斐マ」とみてよければ、「人名十〇〇升」という書式となるので、米支給の帳簿である可能性がでてこよう。(1)も「升」の上に横画らしき文字がみえ、その下が削

書になっているので、あるいは米に關わる帳簿かもしない。米の支給を受けた者とは、(5)の「火」から示唆されるように、平城宮造営に携わった役丁が多くを占めていたことであろう。このことは、荷札本簡の考察からも導かれることがある。

このように本木簡群は、造営の状況とも合致するように、平城宮造営に関わるものが大部分を占めており、ここに最大の特徴がある。削屑の量も少なくなく、木簡を使用した業務活動を窺わせてくれる。ただし狹義の文書木簡は現状ではみいだせず、造営担当官司内にとどまる木簡利用となつてている点には注意しておきたい。

9 關係文献

奈良国立文化財研究所『昭和四九年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七五年)

同『奈良国立文化財研究所年報一九七五』(一九七六年)

同『平城宮發掘調査出土木簡概報』一〇(一九七五年)

(市  
大樹)

「木簡研究」在庫状況のお知らせ

備  
一・四号 品切れ

五・六号 三五〇〇円

七・二号 三八〇〇円

一三号 四三〇〇円

一四・一五号 四五〇〇円

一六一・三号 五五〇〇円

送  
一冊 六〇〇円

二冊 八〇〇円

三冊 一〇〇〇円

四冊 一二〇〇円

五・一〇冊 一五〇〇円

一一・一〇冊 二〇〇〇円

※個人購入の場合は代金前納です。代金と送料は郵便振替で

○一〇〇〇一六一・一五二七 木簡学会

までお送り下さい。

※大学・博物館など公的機関の場合は代金後納です。銀行振  
込か右の郵便振替でお願いします。

口座番号 みずほ銀行西大寺出張所

普通預金 一一〇三一五

口座名 木簡学会 佐藤宗諱(さとう そうじゅん)

連絡先 千六三〇一八五七七 奈良市一条町二丁目九番一号

奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部史料調査室氣付

電話 ○七四一・一三〇一六八三七

## 木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及

をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つきの事業を行う。

1 木簡に関する情報の蒐集および整理

2 研究集会の開催

3 会誌「木簡研究」その他の刊行

4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力

5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する個人および団体は会員になることができる。

二 本会に入会しようとする場合は、会員二名の推薦が必要とし、委員会の承認を得なければならない。ただし団体については、会員の推薦は必要としない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は

総会において決定する。

四 会員は總会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

1 会長一名

2 副会長一名

3 委員若干名

4 監事二名

第七条 委員・監事は總会において選出され、任期は二年とする。

ただし再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回總会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金等をもつてて、總会において会計報告を行うものとする。

第十条 この会則の変更は總会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

# 彙報

## 第二三回総会及び研究集会

木簡学会第二三回総会および研究集会は、一〇〇一年二月一日両日に、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、一六人の個人会員、二団体の団体会員の参加を得て開催された。会場には平城宮跡出土木簡・藤原京跡左京七条一坊西南坪出土木簡(以上、奈良文化財研究所)、長岡京跡右京六条二坊六町出土木簡(開長岡京市埋蔵文化財センター)、元岡・桑原遺跡群出土木簡(福岡市教育委員会)、安芸高田分寺跡出土木簡(動東広島市教育文化振興事業団)の他、平城宮跡出土の漆紙文書も展示された。

△一〇〇一年二月一日(土)(一三時~一八時)

### 第三回総会(議長 南部昇氏)

佐藤宗諱会長による開会挨拶の後、以下の報告が行なわれた。

会務報告(渡辺見宏委員)

会員の状況(個人会員三三一名、海外会員三名、団体会員四団体のほか、一〇〇一年度新入会員四名)、但馬特別研究集会の日程(一〇〇一年七月五~七日)などが報告された。

編集報告(西山良平委員)

「木簡研究」第二三号の編集経過について、内容、分量、価値などの報告がなされた。今後の編集上の課題として、未掲載分の事実報告の掲載に一層努力すべきであるとの指摘がなされた。

会計・監査報告(山中敏史委員・石上英一監事)

山中委員から一〇〇〇年度の会計(一般会計及び特別会計)決算報告がなされ、石上監事より会計業務が適正に執行されている旨の監査報告がなされた。ついで、山中委員より一〇〇一年度の予算案が提案された。

以上の案件はすべて承認された。

## 研究集会

報告(司会 清水みき委員)

墨書き土器と木簡

都城出土漆紙文書の来歴

長岡京右京六条二坊六町の調査と出土木簡 中島哲夫氏

高島英之氏  
古尾谷知浩氏

高島氏の報告は、所管名墨書き土器と物品付札との比較や、祭祀道具としての墨書き土器・木簡の考察を行なったもの、古尾谷氏の報告は、漆紙文書について反故紙の供給元や漆紙文書が生じるまでの過程など史料学的問題点を整理したもの、中島氏の報告は長岡京右京六条二坊六町出土木簡についての事例報告である。このうち、古尾谷氏の報告については本号に論文を頂戴することができた。中島氏の報告については、本誌第二三号に既に掲載済みである。

◇一二月二日（日）（九時～五時）

研究集会

報告（司会 吉川真司委員）

一〇〇一年全国出土の木簡

藤原京跡左京七条一坊西南坪出土の木簡

波辺見宏氏  
山下信一郎氏

元岡・桑原遺跡群の調査と出土木簡

吉留秀敏氏・坂上康俊氏

行委員会（委員 今津勝紀・岡崎正雄（一〇〇一年三月まで）・加賀見者  
一・鎌田元・小寺誠・轟老拓治（一〇〇一年四月から）・館野和己・寺  
崎保廣・吉川真司・渡辺亮宏の各氏。委員長鎌田氏、事務局長加賀見氏）  
と運営委員会（委員 池田正男・大村敬通・加賀見者一・鎌田元・小寺  
誠・瀬崎誠・田畠基・中島雄二・中村弘・松井敬代・山根寅生子の各氏。  
委員長大村氏）が担当した。また、開催にあたっては、豊岡市教育  
委員会・朝来町教育委員会・竹野町教育委員会・朝来郡広域行政事  
務組合・養父郡広域事務組合・但馬考古学研究会・神戸新聞社の後  
援をいただき、木簡出土地の各教育委員会をはじめ、地元の方々に  
多大な協力をいただいた。今回も、会員のみでなく地元の研究者や  
全国の大学にも参加を呼びかけ、多数の方々の参加をいただくこと  
ができた。

午後に入り、前日の報告も含めて活発な討論が行なわれた。  
最後に鎌田元一副会長の挨拶で閉会した。

但馬特別研究集会

一〇〇一年七月五日（金）・六日（土）の両日、兵庫県城崎郡日  
高町において、但馬特別研究集会が開催された。木簡出土の現地に  
おける研究集会は、一九九四年九月の新潟特別研究集会、一九九八  
年六月の長野特別研究集会に続く第二回目のものである。木簡学会  
の主催、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・出石町教育委員  
会・日高町教育委員会の共催として実施し、実務は別に組織した実

渡辺氏の報告は全国七一遺跡から出土した木簡の概要についての  
報告で、その多くは本号に掲載できた。山下氏の報告は藤原宮の南  
側で出土した中務省関連の木簡についての事例報告・吉留氏・坂上  
氏の報告は元岡・桑原遺跡群の調査概要と出土木簡についての事例  
報告である。

討論（司会 篠野和己委員）

◇一〇〇一年七月五日（金）（午後一時～五時）

現地見学会

JR和田山駅に集合し、バス四台に分乗して見学会に出発した。  
山東町で駅子の出撃に間わる木簡が出土し栗庵駅にも比定される  
柴遺跡と栗庵神社を見学した後、出石町に向かい寺跡遺跡の地を訪  
ね、ついで出石神社を見学した。その後日高町で深田遺跡や但馬国  
分寺跡を見学して現地見学会を終えた。その後日高町において懇親  
会を開いた。見学会の参加者は、会員八一名、非会員五十九名、計一  
四〇名であった。

◇一〇〇二年七月六日（土）

研究集会（司会 鶴野和己氏・今津勝紀氏）

「古代但馬國と木簡」と題して、日高町文化体育館において、研究集会を開催した。佐藤宗諱会長の開会挨拶、来賓の日高町長清水豊氏の歓迎挨拶の後、次の五本の基調報告が行なわれた。

日高町の古代遺跡と出土木簡

出石町の古代遺跡と木簡

袴狹遺跡出土木簡と但馬國豐岡盆地の条里

九世紀の国都支配と但馬國木簡

文書と題載軸

基調報告の後、実行委員の鶴野和己氏・今津勝紀氏の司会によつて討論が行なわれ、鎌田元一実行委員長の挨拶によつて閉会した。

参加者は、会員九二名、非会員一一四名、計二〇六名であった。

お、別室では、但馬國分寺跡・林布ケ森遺跡・深田遺跡・袴狹遺跡・砂入遺跡・入佐川遺跡・宮内廬跡遺跡・香住エノ田遺跡・見蔵圓遺跡など、但馬國の古代を中心とする木簡が一堂に会して展示された。

以上の報告および討論の概要については、本号に掲載した。

なお、翌七月七日（日）の九時から四時まで、「わたしたちのまち但馬—木簡からみた古代の但馬」が二七〇名の参加者を得て日高町文化体育館において開催された。主催は同シンボジウム実行委員

会、共催は木簡学会・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所・出石町教育委員会・日高町教育委員会である。また、農園市教育委員会・朝来郡教育委員会・竹野町教育委員会・朝来郡広域行政事務組合・養父郡広域事務組合・但馬考古学協会・神戸新聞社の後援をえた。内容は大平茂・木下良・西口圭介・鎌田元一・佐竹昭各氏の基調報告、および加賀見省一・寺崎保廣両氏の司会によるディスカッションで構成されたものであった。今回は、研究集会と内容が重なるなかたため、多数の会員の参加も得られ、地元の方々とともに、第一次但馬國府の所在地など地元但馬の古代史の課題に迫ることができた。

#### 委員会報告

◇一〇〇一年二月一日（土）一〇時三〇分～一二時

於奈良文化財研究所

総会に先立ち、会務、会計、第二・三回総会・研究集会の運営、会誌第一三号の編集経過と頒布価格、創立二〇周年記念図録の編集と出版形態などについて報告が行なわれ、審議の上承認された。

◇一〇〇一年六月一七日（月）一四時～一八時

於奈良文化財研究所

1会務について、会員の異動が報告され、また、会長による常任委員の委嘱についての報告があった。2入会審査について、九人（日本古代史七人、考古学一人）の新入会申し込みのある旨が報告さ

れ、入会審査を行なつた。31000年年度決算報告および監査報告が行なわれ、いずれも承認された。4会誌第一四号の編集経過（担当は寺崎保広委員、馬場基幹事）について報告がなされた。5創立二〇周年記念図録の出版形態および編集状況について報告がなされた。

6但馬特別研究集会について参加申し込み状況などが報告された。  
7第二回総会・研究集会の予定についての検討が行なわれた。8

京奈和道問題のその後の経過について報告がなされた。9その他、今後の本簡学会の体制などについて議論がなされた。

◇1002年10月29日（金）一四時～一七時

1会務について、会員の異動及び、常任委員会・幹事会の開催状況が報告された。2入会希望者九人の審査が行なわれ、全員の入会が承認された。3会誌第一四号編集状況について報告が行なわれた。4会計について、1002年中間報告が行なわれ、1003年度の予算案について審議した。5第二回総会・研究集会の日程、内容などを審議した。6本年七月に実施した但馬特別研究集会の結果、及び会計についての報告が行なわれた。（次項参照）  
る取り組みについてその後の経過の報告が行なわれた。

（鶴見泰寿）

京奈和高速自動車道の平城宮跡地下トンネル計画に対する取り組み  
◇1000年6月9日（金）

木簡学会1000年年度第一回委員会において、「京奈和自動車道の平城宮跡地下通過計画の撤回を求める要望書」を決議し、関係各機関などに送付（本誌第一二号会告参照）。また、諸学会・団体に運動への取り組みを呼びかける。

◇1000年1月21日（土）

木簡学会第二回総会において、「京奈和道の平城宮跡通過の即時撤回を求める要望書」を決議し、関係各機関などに送付（本誌第一三号会告参照）。

◇1000年8月30日（木）

委員会（持ち回り）の了解のもと、シンポジウム「世界遺産平城宮跡を考える」実行委員会への参加を決定。

◇1000年9月18日（火）

シンポジウム「世界遺産平城宮跡を考える」第一回実行委員会（構成団体は一九団体）於奈良県文化会館

◇1000年10月4日（日）

同第二回実行委員会。於奈良合同法律事務所。これ以後、幹事団体として参加。

◇1000年1月5日（月）

同第三回実行委員会 於奈良県教育会館

同第四回実行委員会 於明治大学考古博物館

- ◇二〇〇一年一月一日（日）  
第一回「世界遺産平城宮跡を考える」シンポジウムを開催。於明治大学大学会館大会議室。参加者約二〇〇名。「京奈和自動車道の世界遺産平城宮跡地下通過計画の白紙撤回を求めるアピール」を探査し、関係各機関などに送付。シンポジウム記録を、直木孝次郎・鈴木重治編『世界遺産平城宮跡を考える』として刊行（二〇〇一年一月、ケイ・アイ・メディア）。なお、当日、歴史学研究会とともに司会を担当。
- ◇二〇〇一年一月三日（金）  
同第五回実行委員会 於奈良県教育会館 実行委員会の総括と第二回シンポジウムの開催を決定。
- ◇二〇〇一年四月一六日（火）  
同第六回実行委員会 於奈良県教育会館
- ◇二〇〇一年五月二二日（火）  
同第七回実行委員会 於奈良県教育会館
- ◇二〇〇一年六月二十四日（月）  
同第八回実行委員会 於奈良県教育会館
- ◇二〇〇一年七月八日（月）  
文化財検討委員会の提言のとりまとめを前に、本専門会のこれまでの取り組みについて理解を求める書簡を文化財検討委員に送付。
- ◇二〇〇一年七月十九日（金）

同第九回実行委員会 於奈良県教育会館

◇二〇〇一年七月三日（火）  
文化財検討委員会の提言を受け、これを確実に実行していくよう、関係各機関などに求める書簡を送付。

◇二〇〇一年九月二日（月）  
同第一〇回実行委員会 於奈良県教育会館

◇二〇〇一年九月二八日（土）  
同第一回実行委員会（東京実行委員会） 於明治大学考古学博物館

◇二〇〇一年一〇月四日（金）  
同第二回実行委員会 於奈良県教育会館

◇二〇〇一年一〇月二八日（月）  
同第一三回実行委員会 於奈良県教育会館

◇二〇〇一年一月一六日（土）  
同第一四回実行委員会 於明治大学考古学博物館

◇二〇〇一年一月一七日（日）  
第二回「世界遺産平城宮跡を考える」シンポジウムを開催。於明治大学大学会館大会議室。参加者約二五〇名。「京奈和高速自動車道の世界遺産平城宮（京）跡地下通過計画の白紙撤回を求めるアピール」を探査（詳細は本号P.5を参照）。

PROCEEDINGS OF THE JAPANESE SOCIETY  
FOR THE STUDY  
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 24 2002

Contents

Foreword: IT Advances, Pine and <i>Hinoki</i> (Cypress).....	TŌNO Haruyuki.....	i
Contents .....	iii	
Legend .....	vii	
Wooden Documents Recovered in 2001.....	1	
Outline.....	SAGIMORI Hiroyuki.....	1
Explanatory Notes .....	6	
Nara Prefecture: Eastern Market Remains (presumed), Nari Capital Site; Former Precinct, Yakushiji Temple; Garden at the Former Daijōin Temple; Tōdaiji Temple; Fujiwara Palace Site; East Second Ward on Second Street, Fujiwara Capital Site; East Second Ward on Sixth and Seventh Streets, Fujiwara Capital Site; Ishigami Site; Asuka'ike Site		
Kyoto Prefecture: Nagaoka Capital Site; Blocks 7, 8, 9 and 10, West Third Ward on Sixth Street, Heian Capital Site; Sayama Site (Area B2)		
Osaka Prefecture: Osaka Castle Site; site located in Higashi Shinsaibashi 1-chōme; Hiroshima Fief Osaka Warehouse Site; Kitoragawa Site; Kōzushima Site; Uemachi Higashi Site		
Hyogo Prefecture: Rokujō Site; Samurai Mansion Remains, Akashi Castle; Mizo no Kuchi Site; <i>Ninomaru</i> (Secondary Enclosure), Akō Castle Remains		
Aichi Prefecture: Shiga Park Site; Shimokake Site		
Shizuoka Prefecture: Nitta Mansion Site		
Kanagawa Prefecture: Precincts of Kenchōji Temple (a designated Historic Site)		

Shiga Prefecture: Miyamachi Site; Yanagi Site; Hakkakudō Site	
Gifu Prefecture: Kakida Site	
Nagano Prefecture: Shagūji Site, Yawata Site Group	
Fukushima Prefecture: Attame <i>Jōri</i> Field System Remains, Sunahata Site; Izumi Abandoned Temple Site (Michinokuni Namekata District Headquarters)	
Miyagi Prefecture: Nakano Takayanagi Site; Ichikawabashi Site	
Iwate Prefecture: Sennin Nishi Site	
Akita Prefecture: Jūnishō B Site; Kannonji Abandoned Temple Site; Honjō Castle Site; Kita Site; Hannyadai Site	
Aomori Prefecture: Takarna (6) Site	
Fukui Prefecture: Fukui Castle Site	
Ishikawa Prefecture: Uneda/Jichū Site; Kitachūjō Site; Sashie B Site; Yotsuyanagi Hakusanshita Site	
Wooden Documents Recovered before 1977 (24).....	158
Niigata Prefecture: Teraji Site; Iwakura Site; Test Excavation in Yokawa, Muikamachi; Kita Shōwaki Site; Uramawari Site; Funato Sakurada Site; Funato Kawasaki Site	
Shimane Prefecture: Izumo Provincial Headquarters Site	
Okayama Prefecture: Kawairi/Nakanatsukawa Site	
Hiroshima Prefecture: Aki Provincial Monastery Site	
Tokushima Prefecture: Minami Maegawa-chō 1-chōme Site	
Ehime Prefecture: Minami Saya Doi Kita Site	
Kōchi Prefecture: Detached Residence Site (presumed), Kōchi Castle	
Saga Prefecture: Nakabara Site	
Kagoshima Prefecture: Kyōden Site	
Nara Prefecture: Nara Palace Site	
Revisions and Additions (5) .....	164
Attame <i>Jōri</i> Field System Remains, Fukushima Prefecture (No. 17); Iizuka Site, Ōita Prefecture (No. 22)	
Article	
The History of Lacquer-Permeated Documents	
Recovered from Ancient Capitals.....	FURUOYA Tomohiro..... 173
Record of the Congress in Tajima .....	187
The Ancient Site in Hidaka-chō and Its Wooden Documents .....	KAGAMI Shōichi..... 188
The Ancient Site and Wooden Documents of Izushi-chō.....	KODERA Makoto..... 200
The Wooden Documents Recovered from the Hakaza Site and the <i>Jōri</i> Field System of the Toyooka Basin in the Ancient Province of Tajima .....	YAMAMOTO Takashi..... 208
The Administration of Provinces and Districts in the Ninth Century and the Wooden Documents from	

the Ancient Province of Tajima .....	YOSHIKAWA Shinji.....	224
Ancient Documents and Labeled Scroll Spindles		
(Presentation Abstract) .....	SUGIMOTO Kazuki.....	240
Summary of the Discussion .....	TATENO Kazumi and IMAZU Katsunori.....	248
Bulletins .....	TSURUMI Yasutoshi and WATANABE Akihiro.....	253
Editor's Notes .....	TERASAKI Yasuhiro.....	258
Column:		
An Ink-Inscribed Stone Recovered from the Kubokawa Site in the East Capital, Nagaoka		
Capital Site .....	KOGA Masahiro.....	171
Reports of the Society:		
On the Current Status of the Plan to Pass a High-Speed Thoroughfare Beneath the Nara Palace Site and the Society's Involvement with this Problem, and the Convening of a Second "Symposium to Consider the Crisis Facing the Nara Palace Site and Nara Capital City Site from the Plan for a High-Speed Thoroughfare" .....		251

*Published by*  
**THE JAPANESE SOCIETY  
 FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS**

木簡研究 第二十四号

二〇〇一年十一月二十日 印刷  
二〇〇一年十一月二十五日 発行

〒630-8577 奈良市三条町三丁目九番一号  
奈良文化財研究所

編集発行 木 簡 學 會  
会員 佐藤宗勝 担付

TEL (0743) 330-6827  
E-mail mokken@nabunken.go.jp

振替口座 00001-61-15317

〒600-8475 京都市下京区油小路弘光寺上ル  
真 隅  
TEL (075) 351-6034 社

ISSN 0912-2060



ISSN 0912-2060